

拜啓 早春の候愈々而清祥の候
おもしろい申すはます

成書「茅土」をとお送る致し
今回は私の最初の海外旅行の地
又留学増派遺 最初の地にも
タイと特集としましたのぞらん
だけすしあら幸甚にあら
今後次第に好むを述べます
何卒お体にはお気と付けら
たくまは御挨拶申すは
挨拶をいす

今春

武志

王宮光寺住持 黒田大園

(武志)

各 位

聖者ひじりを見ることは

善きんなり

聖者と共に住むは

つねに幸さいいな

おろかなる者を

見みざるは

心つねにたのしからん

〈法句経〉

第 13 卷

森 秀

SEIJU

秋 号

1989



燦然と輝く大日如来





燦然と輝く大日如来





名誉顧問に山田天台座主

善光寺海外留学僧派遣育英会は、このたび名誉顧問に天台宗比叡山延暦寺の山田恵諦座主を推戴。かねてより育英会に関心を寄せられていた山田天台座主は就任を快諾された。比叡山は仏教各宗派ゆかりの地であり、座主が名誉顧問になられたことにより、育英会ますますの発展が期待される。





立正佼成会・庭野日敬会長と対談

黒田武志住職は立正佼成会に招かれ大聖堂におもむき、庭野日敬会長と親しく歓談した。庭野会長は現在、世界宗教者平和会議を推進されており、世界に活眼を開く人材育成の留学僧派遣事業に深い理解を示された。詳細は本文24頁に。

(写真提供・『佼成』八月号)







上・大雄山最乗寺余語翠巖老師を大導師
として記念法要が営まれた
右・お礼を述べる黒田住職夫妻

善光寺開創20周年 記念法要



上・香り高いお茶が供えられる
左・釈迦殿を埋めた檀信徒の方々

法要後、垂示される余語老師



本寺光真寺住職黒田俊雄師と母堂



龍光寺・佐藤俊明師

記念講演が東隆真駒沢女子短期大学学監によって
行われた



檀徒を代表して謝辞を述べる開基家



善光寺開創20周年 記念法要



上・香り高いお茶が供えられる
左・釈迦殿を埋めた檀信徒の方々



上・大雄山最乗寺余語翠巖老師を大導師
として記念法要が営まれた
右・お礼を述べる黒田住職夫妻

法要後、垂示される余語老師



本寺光真寺住職黒田俊雄師と母堂



龍光寺・佐藤俊明師

記念講演が東隆真駒沢女子短期大学学監によって
行われた



檀徒を代表して謝辞を述べる開基家



これからが正念場

開創二十周年記念の事業及び行事、初中後何の魔障もなく、首尾よく無事円成いたしました。これひとえに檀信徒の皆様の大なる協賛の賜物で、厚く厚く御礼申し上げます。私はいま感謝の念に包まれて、過ぎ来し方をふり返っております。

幼少の頃、母親の膝に抱かれて、「昔、昔、あつたけど……」ではじまる昔話に胸をときめかした思い出はごなたもお持ちのことでありましょう。十年一昔といえますから、昔、昔、となると二十年。二十年ともなれば世の中は想像できないほど変わるので、昔、昔、ではじまる昔話は異次元の世界の出来事のように興味深く耳にひびくのです。

二十年前、アメリカから無一物で帰ってきたばかりの私は、すでに人手に渡っている小庵を譲り受け、宗教法人「善光寺」の設立に着手しましたことは前にも書きましたが、その当時のことは、ご存

知らないお方にはとても想像できないことでありましょう。善光寺はいまようやく昔話のできる寺に成長しました。

そしてその間、二十年の歩みは、檀信徒の皆様方の理解ある御協力により、さいわいにして大過のないものとなつたというよりは、いささかなりとも世に貢献できるものであつたことを自負し、無上の喜びとし、感謝してゐるものであります。

開創二十年を迎えた今年はまだ、比叡山延暦寺の山田天台座主の警咳に接する光栄に浴し、さらには立正佼成会の庭野日敬会長先生と親しく対談する機会を得るなど、善光寺はいよいよ世の注目を受けるようになりました。

善光寺は二十年、そして私は齡五十、天命を知る年齢に達しました。天命を知るとは、天から与えられた使命を知ることであり、人事を尽くして天命を待つ心の境に達するのが五十歳ということですから、これからがいよいよ天命の重きを深く深く心に刻み、さらに一段の精進を誓うものであります。何卒倍旧の御支援をお願い致します。

合掌

名誉顧問に山田天台座主

善光寺海外留学僧派遣育英会は、このたび名誉顧問に天台宗比叡山延暦寺の山田恵諦座主を推戴。かねてより育英会に関心を寄せられていた山田天台座主は就任を快諾された。比叡山は仏教各宗派ゆかりの地であり、座主が名誉顧問になられたことにより、育英会ますますの発展が期待される。





立正佼成会・庭野日敬会長と対談

黒田武志住職は立正佼成会に招かれ大聖堂におもむき、庭野日敬会長と親しく歓談した。庭野会長は現在、世界宗教者平和会議を推進されており、世界に活眼を開く人材育成の留学僧派遣事業に深い理解を示された。詳細は本文24頁に。

(写真提供・『佼成』八月号)





善光寺開創20周年 記念法要



上・香り高いお茶が供えられる
左・釈迦殿を埋めた檀信徒の方々



上・大雄山最乗寺余語翠巖老師を大導師
として記念法要が営まれた
右・お礼を述べる黒田住職夫妻

法要後、垂示される余語老師



本寺光真寺住職黒田俊雄師と母堂



龍光寺・佐藤俊明師

記念講演が東隆真駒沢女子短期大学学監によって
行われた



檀徒を代表して謝辞を述べる開基家





善光寺〃合唱隊〃

赤 間 義 徳

方丈様はひとり經典を開いた。

最初の読経が

仏法興隆の大誓願が

不動殿に響き渡った。

それから二十年――。

方丈様のまわりに

善男善女が集まり続け

二千五百軒の檀信徒の読経が

釈迦殿 不動殿に響いている。



心を合わせ 声を合わせ

読経しているうちに

方丈様を中心に

ひとりひとりが結ばれているんだ

と素直にうれしくなってくる。

それは さながら

方丈様の指揮による

われら 善光寺「合唱隊」。

心のコーラスの輪をひろげていこう。

二十一世紀の地球のまわりに

新しい仲間たちと

手をつないでいこう。



善光寺〃合唱隊〃

赤 間 義 徳

方丈様はひとり經典を開いた。

最初の読経が

仏法興隆の大誓願が

不動殿に響き渡った。

それから二十年――。

方丈様のまわりに

善男善女が集まり続け

二千五百軒の檀信徒の読経が

釈迦殿 不動殿に響いている。



心を合わせ 声を合わせ

読経しているうちに

方丈様を中心に

ひとりひとりが結ばれているんだ

と素直にうれしくなってくる。

それは さながら

方丈様の指揮による

われら 善光寺「合唱隊」。

心のコーラスの輪をひろげていこう。

二十一世紀の地球のまわりに

新しい仲間たちと

手をつないでいこう。



增長院
沙門三喜庵

カラ―	■燦然と輝く大日如来	山田 恵諦	18
特別寄稿	●世界的視野に立つ宗教家の育成を	山田 恵諦	18
対談	●世界に活眼を開く人材を育成したい〈庭野立正佼正会会長と対談〉	小倉 玄照	24
連載	●くらしの中で読む「正法眼蔵」	阿部 慈園	40
留学記	●出版記念パーティ(2)	保坂 俊司	47
	●シク教の祈りの根底にあるもの	清水 晶子	51
エッセイ	●家の内と外	引田 弘道	55
入選論文	●21世紀の仏教と私の役割	村畑 亮二	59
	●禅の国際化と私の役割	山本 浄月	63
	●タイの仏教に学びたいこと	山本 浄月	67
	●未来社会の仏教と私の役割	茂松 性典	72
	●21世紀の仏教と私の役割	韓 京洙	76
留学記	●日本の英語教育と私の英語力(2)	島 岩	80
	●アメリカ留学体験記(2)	島崎 義孝	90
善光寺だより		118
読者からのお便り		122

題字・グラビア・さし絵
カット
伊藤三喜庵
古刷仏集より

○特別寄稿

世界的視野に立つ宗教家の育成を

天台宗座主 山田 恵諦

留学という言葉を耳にすると、留学する人に対して大半の人は「優秀な人」「将来に期待のもてる人」「新しい文化、知職を将来する人」その他いろいろと期待感を持つ場合が多い。

確かに、遣随使が留学生を伴って大陸に初めて渡って以来、中国を始め近世の欧米と、千数百年間、日本は海外に学ぶものが多かった。それだけに、公費、私費の区別なく、留学を見事に果たした人は、それなりの立派な成果を挙げ、

日本史上に数多くの人が名を残す結果となったことが、留学する人に多くの人が期待感を寄せる最大の理由かも知れない。しかし、現在の日本はまさに世界経済を左右するまでになり、近年はこれまでと逆に数多くの留学生を受入れる立場になってしまった。それはそれでよいので、それとは別に私どもが海外に学ばねばならないことは山ほどある。ましてやグローバル（地球的）な立場で考え、行動しなければならぬ現

在においてはなおさらであり、宗教の世界においても例外でない。

宗教は、ともすれば宗我にとらわれ、他宗教を排斥する傾向が古来から続いている。團結を必要とする民族意識の立場から止むを得ないことであるが、世界は一つという意識が昂揚せられつつある昨今、すべての宗教が従来の排他主義を変更して共通の面で共存共栄の世界を作り出すことが必要で、たとえば、平和の祈りやフオーコラーレを通じて人類の福祉を目標に活動を拓める必要があると思う。

このように考えて日本宗教界の現状を見ると、旧襲維持に重点を置く教化活動の宗派が多く目につき、このままでは世界に流れている信仰情況から孤立するだけでなく、或は日本の心ある人達から見捨てられる怖れさえもある。

今年一月に私の寺から使いの人がバチカンに行ったとき、「この頃私の方の大学で仏教学科を

設けた。宗派、教派に偏らない普遍的な教説を示している仏教の英訳の本があったら寄贈して欲しいということであった」との報告をうけた。欧米では多くの宗教家が宗教の本質に立ち還って、個々の宗教心を満足させることによって、自己の使命を果したいという導きをしている。宣教師が増加しつつあると伝えられている。また、日本では見ることも、体験することも出来ない宗教活動が、外国では行なわれている。その一つとして、政教分離、信教の自由を保証している国において、公共施設が宗教活動に開放されているケース。国家の宗教保護が宗教者の生活、活動にまで及び、民間がまたそれを習うケースと、私たちが学び、実践しなければならぬ点は枚挙にいとまがない有様である。

これらの点に、ユニバーサルな立場に立つていられる黒田武志（大圓）老師は心配されたのだろうか、自ら善光寺海外留学僧派遣育英会を

創始され、莫大な経費をかけて次々とタイ、インド、アメリカ、その他へ幾多の有能な青年僧を送り出されていることは、感謝にたえない。

殊にこの趣旨を本願として新たな土地に新寺を建立し、趣旨に賛同する人びとが新しく檀徒、信徒となつて事業や経営を補佐していられることは、導く人も導かれる人も、ともに真実の菩薩行を實踐せられている、真実の生きた仏教活動として敬服せざるを得ない。世は末世と慨く数々の宗教行為の存在する現代において、このような真実の仏教精神を發揮せられることは、多くの人に広く仏教の進路を提示したことになる、我れ劣らじと多くの青年僧が奮起して下さるならありがたいことである。

比叡山仏教を開いた伝教大師は

凡そ仏法を傳持する有知の丈夫は、誠に須し
自宗の義といえども、若し邪義あらば後学に指
示して誑惑（おうわく）すべからず、他宗の義

といえども、若し正義あらば、取り用いて伝うべし、これ則ち智人なり。法華去惑。

と申されている。伝灯は仏法の生命であるが時代に相應した教法実践はより以上に大切である。法華經には「方便の門を開いて真実の相を示せ」と仰せられている。如何にして教法を活用して真実の相を示すか、それがこれからの仏教徒の使命である。

今後、育英会がますます發展して、留学する人が多くなり、世界的視野に立つた宗教活動が盛んになれば、自然に平和がもたらされ世界は一つの氣運が盛り挙つて宗教的生活に満ちた世の中が實現するであろう。

黒田老師のご活躍に感謝し、檀徒、信徒の皆さまの慈愛の心が二十一世紀のよき仏国土を育成されるよう祈念します。

名誉顧問に山田天台座主

善光寺海外留学僧派遣育英会は、このたび名誉顧問に天台宗比叡山延暦寺の山田恵諦座主を推戴。かねてより育英会に関心を寄せられていた山田天台座主は就任を快諾された。比叡山は仏教各宗派ゆかりの地であり、座主が名誉顧問になられたことにより、育英会ますますの発展が期待される。





開創20周年祝い法要

——もう少し頑張ろう——

黒田住職がお礼

横浜市港南区日野町の曹洞宗善光寺（黒田武志住職）で開創二十周年記念法要並びに式典が五月二十四日午後二時から、大雄山最乗寺の余語翠巖山主を導師に迎えて挙行された。法要に先だつて駒沢女子短期大学の東隆眞学監による記念講演が行なわれ、「釈迦殿」は檀信徒や有縁の僧俗で埋まった。

当日は緑の風かおる好天に恵まれた。午後一時からの記念講演で東学監は、仏教精神に基づく女子教育にたずさわる者の立場から、女性、

とくに母親の偉大な教育の力などについて話した。

東学監は「父親は客観的・知的に子供を見るが、母親は主観的・情的に子供を見る。しかし、その母親がいなければ子供は育たない」と母親の無償の愛の尊さを例を挙げて説いた。

大本山永平寺六十七世の北野元峰禪師は貧しい農家に生まれ、幼くして寺にあずけられた。禪師の母は、「これからは仏さまの子供だから、辛くても家へ帰ってはいけない。でも、おまえ

が悪いことをしたり、世間から相手にされなくなった時はいつでも帰っておいで」と諭した。

北野禅師は約束を守り通し、やがてその高い徳を崇められる僧となつてから母の危篤の報に接しても、すぐには母のもとへは帰らなかつた。

臨終の枕元によくやく駆けつけた禅師は、母の耳もとにそれと告げると、瞬間、母は目を開き「私は一日たりともおまえのことを忘れなかつた」と言つて目を閉じたという。「母親のこのひとことが子供を育てるのです」と東学監は語つた。

また、大本山総持寺を開いた太祖瑩山禅師の母は観音祈願により、高齢で禅師を生んだ。のちに瑩山禅師は能登に総持寺を開き、山門建立を発願して、その中に観音、地藏の放光菩薩二体を安置することを願つた。放光菩薩は安産の靈験あらたかな仏さまである。母の禅師に対する祈りが、山門にこめられている。しかし、実

際に山門が完成したのは禅師の没後八十三年目、二十七世石屋真梁禅師の代。やつとその偉容をあらわしたのである。いま大本山総持寺祖院の山門は、総ケヤキの重層の楼門で、一人の尼僧が寄進勧募の中心だつた。明治三十一年に一山が全焼したので、これを再建するべく立ちあがったのが、山崎心英という尼僧さんであつた。

その後、明治の末、総持寺は、横浜市鶴見の現在地に移転した。昭和四十四年、鉄筋コンクリート造りでは日本一の山門が現在の総持寺に完成した。日本一の山林王・木原豊次郎(法名・崇雲)氏の一寄進によるもので、木原氏は亡き妻の遺言と供養のためにこれを寄進したという。——東学監はこのように女性の力の偉大さを強調した。

引き続き記念法要が余語大雄山主の導師により厳修され、教区・法類・法友寺院、善光寺

海外留学僧派遣育英会の役員、留学僧、檀信徒ら多数が随喜参列した。

法要後、余語山主が垂示し、「本日、導師を勤めさせていただいたのは、本山で共に修行した御縁によるものと思う。その頃から忙しい人で、じつとしていなかった。これは一生なおらないだろう。二十年といえば成人式だ。法を聴かせてもらう場所が出来るのは、死んだ人のお蔭であり、そういう場にお互いが相い逢うことを喜ばなければいけない。仏さまにお花を捧げるのは仏さまの姿だ。そこに仏さまからのめぐらしが現われている。道元禪師に、本来の面目と題する『春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえてすずしかりけり』の有名な歌がある。お寺へ詣つたら、そういう姿を感得してください」とユーモアをまじえて話した。

記念式典では、初めに開基家の村岡有尚氏が「人間でいえば成人というところが、周囲の

寺が三百年、五百年の伝統に立っていることを思えば、二十年はほんの一瞬の経過でしかない。にも抱わらず今日すでに二千有余の檀信徒を擁し、また留学僧を海外に派遣するという、一宗を挙げてでも実行困難な大事業を独自で実施していることはまさに驚異というべきで、黒田方丈の卓抜な実践力には敬服のほかない。そして、黒田方丈が思う存分に腕を振るうことが出来るよう協力を惜しまない檀信徒の皆様が心から感謝する」と祝辞を述べた。

この後、本寺の栃木県大田原市・光真寺住職黒田俊雄師、檀徒総代の伊藤喜三郎氏が祝意を込めて謝辞を述べ、最後に黒田住職が「一つの節目を迎えて、さあもう少し頑張ろうと思っっている」とお礼の言葉を述べて、なごやかな祝宴に移った。

(中外日報より転載)

善光寺開創20周年 記念法要



上・香り高いお茶が供えられる
左・釈迦殿を埋めた檀信徒の方々



上・大雄山最乗寺余語翠巖老師を大導師
として記念法要が営まれた
右・お礼を述べる黒田住職夫妻

法要後、垂示される余語老師



本寺光真寺住職黒田俊雄師と母堂



龍光寺・佐藤俊明師

記念講演が東隆真駒沢女子短期大学学監によって
行われた



檀徒を代表して謝辞を述べる開基家



これからが正念場

開創二十周年記念の事業及び行事、初中後何の魔障もなく、首尾よく無事円成いたしました。これひとえに檀信徒の皆様の大なる協賛の賜物で、厚く厚く御礼申し上げます。私はいま感謝の念に包まれて、過ぎ来し方をふり返っております。

幼少の頃、母親の膝に抱かれて、「昔、昔、あつたけど……」ではじまる昔話に胸をときめかした思い出はごなたもお持ちのことでありましょう。十年一昔といえますから、昔、昔、となると二十年。二十年ともなれば世の中は想像できないほど変わるので、昔、昔、ではじまる昔話は異次元の世界の出来事のように興味深く耳にひびくのです。

二十年前、アメリカから無一物で帰ってきたばかりの私は、すでに人手に渡っている小庵を譲り受け、宗教法人「善光寺」の設立に着手しましたことは前にも書きましたが、その当時のことは、ご存

知らないお方にはとても想像できないことでありましょう。善光寺はいまようやく昔話のできる寺に成長しました。

そしてその間、二十年の歩みは、檀信徒の皆様方の理解ある御協力により、さいわいにして大過のないものとなつたというよりは、いささかなりとも世に貢献できるものであつたことを自負し、無上の喜びとし、感謝しているものであります。

開創二十年を迎えた今年はまだ、比叡山延暦寺の山田天台座主の警咳に接する光栄に浴し、さらには立正佼成会の庭野日敬会長先生と親しく対談する機会を得るなど、善光寺はいよいよ世の注目を受けるようになりました。

善光寺は二十年、そして私は齡五十、天命を知る年齢に達しました。天命を知るとは、天から与えられた使命を知ることであり、人事を尽くして天命を待つ心の境に達するのが五十歳ということですから、これからがいよいよ天命の重きを深く深く心に刻み、さらに一段の精進を誓うものであります。何卒倍旧の御支援をお願い致します。

合掌

立正佼成会・庭野日敬会長と対談

黒田武志住職は立正佼成会に招かれ大聖堂におもむき、庭野日敬会長と親しく歓談した。庭野会長は現在、世界宗教者平和会議を推進されており、世界に活眼を開く人材育成の留学僧派遣事業に深い理解を示された。詳細は本文24頁に。

(写真提供・『佼成』八月号)





世界に活眼を開く人材を育成したい

庭野先生のご活躍に感銘

庭野・あなたのご活躍は、『中外日報』などにも紹介されていて、以前からお会いしたいと思っていました。

黒田・光栄です。私も、庭野先生のご著書を全巻そろえておりまして、先生のご業績を存じあげているつもりです。それに私は、大聖堂に参上するのは二度目でございます。

庭野・そうですか。

黒田・昭和三十九年の、大聖堂の落成式典に連なりました。当時、私の父の黒田白純が全日本仏教会の事務総長をしていて、落成式典に曹洞宗の代表としてお招きをいただいたのです。私は総持寺（横浜市鶴見区）で修行中でしたが、父が「佼成会はいまに世界の佼成会と呼ばれる教団になるはずだから、おまえも勉強のために行きなさい」というので、若輩ながら参列させ



ていただきました。

庭野・なにか参考になりましたか。

黒田・それはもう……。私どもが大聖堂の玄関で車から降りますと、おたすきをかけたご婦人方が整列されていて、非常に丁寧に案内してくださいました。その一挙一動に信仰の深さがにじみ出ているんですね。そういうご婦人方を見たのは初めてで、「ほんとうの信心を持たれているなあ」と強い感銘を受けました。以来、庭野先生のお姿を遠くからお見受けする機会は何回かございましたが、本日は直接お話しすることができて、たいへんありがたいことと思っております。

庭野・それはどうも……。黒田先生は、私どもが進めている世界宗教者平和会議と同じように、宗教協力を進める事業を計画されているそうですね。

黒田・世界宗教者平和会議に代表される庭野先

生のご活躍は、すでに世界的な評価を得ています。それに比べればアリのように小さなことですが、私には世界に仏法をひろめたいという願いがあるわけです。それにはまず、仏教徒として海外で活躍できる人材の育成が肝心だと考えまして、ささやかながら実践活動をつづけております。

庭野・ほんとうに立派なお仕事ですね。

黒田・庭野先生は、法華経の教えにもとづいて世界平和の実現を推進されています。私は禅僧ですが、毎日、法華経の写経をしていて、いわば法華経を心のよりどころにしているわけです。法華経の実践面でいえば、庭野先生と藤井日達先生が現代の仏教のなかで最高の指導者だと信じてきました。

庭野・これはどうも……。黒田先生はたいへん行動的な方で、いまなさっているお仕事は海外派遣僧育英会でしたね。そのお話をうかがいま

しょう。

一口運動の実践

黒田・私は駒沢大学の大学院を出てから鶴見の総持寺や福井の永平寺で修行し、仏舎利奉拝行脚を志して日本一周しました。それからタイに留学したり、アメリカで向こうの人と坐禅したりして、比較的長い期間、海外で生活してきました。日本にもどり、横浜に善光寺という小さな寺を開きましたが、十八年間で予想以上の檀家さんもでき、寺として一応の基盤がまとまりました。そこで報恩行の一端として、海外に派遣する留学僧を育成するため育英会を設立したわけです。この四月で五回生が出ました。

庭野・たしか、育英会の留学僧は宗派や国籍、男女の別を問わないことになっていますね。中国の方も韓国の方もいらっしやるとか……。失礼ですが、育英資金もたいへんでしょう。

黒田・はい。佼成会では「一食運動」を進めていますね。私どもでは、二千数百戸の檀家の方々に「一食をささげてほしい」とお願いしても、なかなかむずかしい。あれは庭野先生のような大指導者がいらつしやるから可能なのです。そこで、毎食一口だけ節約するという「一口運動」を提唱しました。一口というと、一食あたり一家族で約十円の節約になります。そういう浄財を喜捨していただいて、一年間で相当の額になります。

海外での修行を通じて広く世界に活眼を開く人材を育成したい。それと同時に、少しでも多くの世界の方々に、お釈迦さまの教えをひろめたい……。そうした大きな望みを、私に相応した次元で展開しております。

庭野・仏法がひろまるかどうかは人材いかによりますからね。正しい法がひろまらないと、国は栄えない。同時に、法をいきいきとしたも

のにするのは、その人の実践いかによるわけです。

黒田・ほんとうに同感です。日本は世界最大の仏教国でありながら、世界の太勢に即応して教化の実をあげるシステムに欠けています。私は、その面でも人材育成の重要性を痛感しています。それも、国際感覚の豊かな人材の育成が望まれていくわけです。

庭野・私のところにも、学林という教育機関があります。大学を卒業した青年が仏教を専門的に学ぶところですが、学林を出た青年がほとんどヨーロッパへ行っています。この青年たちが向こうで法華経の講義をしてくるのです。バチカンで一年ほど勉強させてもらい、キリスト教の教えを学んだうえで、ヨーロッパ諸国の教会や学校で法華経の教えを説くわけです。

黒田・私のほうは微々たる力ですが、息ながくつづけていきたいと思っています。日本を救う

ためには世界を救わなくてはなりませんから
……。

庭野・そのとおりですよ。日本だけ救おう、日本だけよくしようとしても、そうはならない。世界を救おうという気持ちになれば、自然と日本もよくなっていくのです。そして、ほんとうに世界を救うとなると、仏教の教えをひろめるのがいちばんの早道なのです。

もっとアジアを大切にしたい

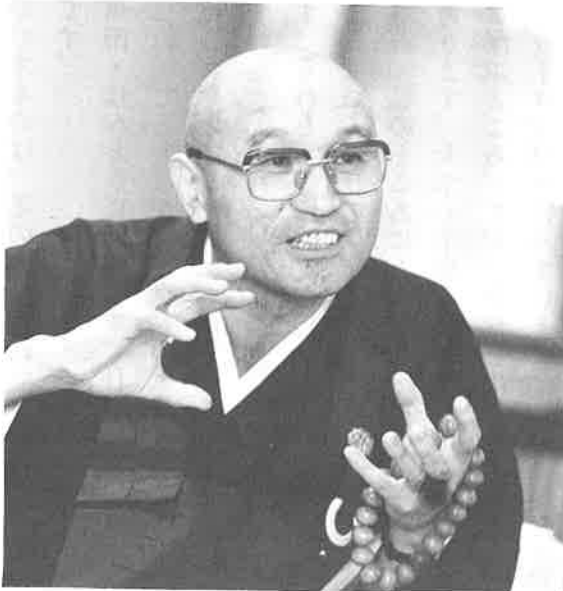
黒田・庭野先生は、世界宗教者平和会議と同時に、アジア宗教者平和会議を進めていらっしやいますね。

庭野・世界宗教者平和会議の第二回会議がベルギーで開かれたとき、「アジアの宗教者だけで平和会議を開きたい」という声が出てきたわけです。

黒田・私はタイで修行してきたこともあって、

その経験から日本の宗教者も、そして日本のみなさんも、もっともつとアジアを大事にしなければならぬと思っています。

庭野・いまは、政治家や経済界の人たちも、欧米にばかり目が向いていますね。そういう欧米一辺倒の姿勢ではなく、アジアやアフリカのよ



佛の誓願に生きる

——光を放つ現代の宗教家——
黒田武志住職
のインタビュ——

高度情報化、国際化、高齢化の大きな波が押し寄せて来ようとも、押し流されるどころか、敢然として立ち向かい、見事な船をつくり、最新技術を駆使して海にのり出す安全操舵の船長・黒田武志師。無一文から始まりわずか二十年足らずで檀家二五〇〇世帯を擁するまでになつた横浜善光寺にはいつも新しいダイナミック

なドラマが展開している。大誓願を立て、住職はその成就をひたすらみ仏に祈り、また檀家を愛する。檀家は住職を信頼し運命を共にしようとする。いつも釈尊の教えの中から秘策を見出し、光を放つ現代の宗教家・黒田武志師を今回はずねてみよう。

《人と思想》

「ちよつとでも邪心があつたら絶対だめだ。」

純粹に、純粹に。私心をなくせ。仏教者のやることは法を説くこと」と、仏の生命そのものを生きようとする黒田師の言葉には何のかざりも

なく、ただその生きざまが声となってあふれてくるばかりだ。

師は徹頭徹尾、仏の誓願に生きようと必死だ。泣きながらやっているという。やせ我慢しながらやっているという。

「人生は誓願だ」と語る師は、これまで二度の大誓願を立てた。その一つは、アメリカに開教師としてつとめていたころ、「日本に帰ったら新寺を建立しよう」ということだった。それは釈尊の説かれた何ものにも片寄らない中道の教え、すべては因縁によって生起するという縁起の教えをもって人々の心を救う正しい教えを高く揚し、世界平和と人類福祉に貢献すべく、多くの人々の心の憩いの場所をつくるために——というものだ。

そもそもタイ国ワットパクナムでの修行から帰ってきた時（一九六六年）、排他的な教条主義と、葬式や法事という人間の死のみに関わる形

骸化した空虚な日本の仏教界の姿に接し、「宗祖を通して釈尊の本源に帰らなければならぬ。

宗派を超えた全一的な仏教、実存者の教化救済こそ重要だ」ということを痛感したという。そのためにはまず広い視野に立つべきと、渡米したのである。

師は八人兄弟の六男として栃木県にある光真寺という曹洞宗の寺に生まれ、傑僧と言われた父・白純住職のもとで法務を叩き込まれた。生活は苦しかったが学問だけはと、駒沢大学の大学院で仏教学の修士課程を終えた。そのまま総持寺（神奈川県）、つづいて永平寺（福井県）へと上山し、修行を積んだのである。しかしどこか心の奥で仏教への疑問、教団や寺院への疑問が湧き起こり、自らの僧侶としての存在意義を問わざるを得なかった。やがて永平寺から下山すると、そのまま全国行脚へ出かけたのである。托鉢の道すがらお経を唱えていると、思いのほ

か喜捨を受け、その時「ああ、私は生かされて
いるんだ」ということを感動的に確信したとい
う。以後、それが師の人生の基礎になった。

師の歩みはひたすら法のために、身を削って、
大誓願に徹して徹して生きる道だ。「精進しなき
やだめだ」という。「人の三倍努力して一歩前進
だ」という。しかし師はただがむしやらにやつ
てきたわけではない。法に生きる熱心には仏の
智恵が与えられた。師は誓願の具現のためにあ
らゆることを考え、実践した。そしてそれは一
つつ実っていった。

人の心を大切にし尊んだ。「自分にできないこ
とは、力のある他の人の手助けをいただくこと
により事は成せるのです」とあらゆる人の智恵
と力を動員した。師のまわりには、日本の仏教
界を代表するような人々が協力を惜しまない。
しかも「利害、打算で考えたら絶対だめだ」と
師が言うごとく、それらの人々とは人間と人間

の不思議な出会いによって結ばれているのだ。

あくまでも師は『学道の人は貧なるべし』を
強調する。「微塵たりとも地位や名譽を欲しがる
ような邪心をおこしてはならない」と言うのだ。

タイ国のワットパクナムに学んだ師は戒律の
重要さ、行の重要さを訴える。「日本の仏教はと
もすれば南方上座部仏教（小乗仏教）を見下げ
る傾向があるが、タイの人々は二百二十七の戒
律を守っており、学ぶべきものが多くある。お
よそ戒律のない宗教があらうか」と師は言う。

「他宗や新興宗教のことをとやかく言う人が
いるが、問題は救われているかどうかだ。僧侶
が人を救うことができなければ意味がない」と
強調する。

師は「宗祖を通して釈尊に還る」ということ
を自らの宗教生活の基盤としている。宗祖であ
る道元、瑩山両禅師も釈尊につながる仏教を純
粋に説いたのであって宗派をつくろうとしたの

ではないという。

師はその意味を込めて釈迦殿を建立した。「宗祖を通して釈尊に還る」。この言葉は本当のものを見つめて、本当のものを創り上げていくという信念の原点だという。

師は言う。「生かされている命を、一滴残らず仏法のために、人のために、使い切ってから一生を閉じよう！現世での仕事をし尽したあとの未来は、仏にまかせて安心して歩いていこう！」

《布教の力》

師は二十年前（一九六九年）にゼロから新寺を建立し、現在では檀家数三千世帯になんなんとしている。この脅威的発展はすでに各種マスキミのとり上げるところとなったが、この短期間の成長にはそれなりの理由があった。

それは死者を葬ることと、その後の供養を寺院経営の主たる柱とし、現に生きている人々の

心に生命を与える宗教本来の使命を忘れた日本の仏教や寺院のあり方に疑問を感じ、では本来の役割を発揮するためにはどうしたらよいかを真剣に求めたのである。

そこでまず、周囲の人々の心を捉えることが先決と、子供に向けた日曜学校を開き、ボーイスカウト運動の育成に力を注ぎ、また少林寺拳法の少年達に坐禅指導をしたり、瑩山禅師の教えのとおり檀家を敬うことと仏のごとく相対した。その努力の積み重ねと、多くの人々の協力の結果が今日の善光寺にほかならないというわけだ。

師はまた立地条件のよさを上げているが、墓碑二万基を擁する壮大な横浜市営日野公園墓地の門前にあること、墓地所有者の三十割は所属する寺院を持っていないこと、横浜は国際都市であることなどの立地条件を生かしたのは、師の理想と決意だ。すなわち、修行の場として、

布教の拠点として、さらには檀信徒の研修センターとして、仏教の国際的使命を果たす拠点として理想的な寺院を創ろうとしたその夢の正しさと決意の強さであった。師は信念をもって誠意の限りを尽し、つとめた。すると周辺の多くの人々は有形、無形の協力をさし向けるようになった。檀家との交流が密接になると、地域の人々から口コミでどんどん拡がっていった。

檀信徒の有形、無形の協力は、仏法のために用いて檀信徒に還元するのは当然の理であるとして、お葬式や法事など必ずその意味を説き、法話を行い檀信徒の気持を安心に導き、あるいは奮い起こした。

週間の行事、年間の行事はぎっしりとつまっている。それらの行事においても必ず法話を行い、バザー、あるいは芸能人を呼んでの清興を催すこともする。これは寺に親しんでもらい、寺と檀信徒および檀信徒相互の心のふれあいを

深めるための手段だ。寺は決して人間の死のみに関わるだけの場所ではないこと、喜怒哀楽すべての心のその折り折りに関わる開かれた場所であることを認識させた。

「学ぶのが檀徒なら、指導するのも檀徒」というわけで、これだけ多数の檀徒がいればあらゆる分部の専門家が揃った。有能な檀信徒たちが強力なブレーンを構成するのである。

《事業と幻》

アメリカから帰ってきた時（一九六九年）、師は全くの無一文であった。全ては借金から始まった。

善光寺の前身は、林堅峰師が、黒田師の父・白純師の勧めもあって建てた長光寺という小庵であった。ところが林師が前年の一九六八年この世を去り、小庵は他人の手に渡っていたもので、それを黒田師が直談判をもって六百万円で

譲り受けたのである。およそ二百坪、もちろん借金によってである。以来、着々と改築、増築、新築、拡張を重ね、一九八〇年には檀家数千六百を超え、翌八十一年には念願の釈迦殿建立に着工、八十二年十月総工費三億七千万円をもって竣工する。

一九八四年、檀家数も二千世帯を超えた善光寺は、開創十五周年を期して、第二の大誓願「海

外留学僧派遣育英会」を発足させた。

これは、人づくりこそ、全ての恩徳に報いることだと、師が最大の情熱を傾けるものだ。これまで歩みと寺の成長も仏天の加護と人々の力によってなされたもの。これに報いる道は「人づくり」しかない。しかしこうした事業は一ヶ寺でなせるものではない。師はこの難行を実行するにあたり、檀家の人々に、ご飯を一食毎



に一口だけ減らして下さい。それで仏法をひろめたい……と訴えた。法輪転ずるところ、食輪自ら転ぜられる”とは師の確信だ。それだけに生命がけて仏法を説く。援助して下さいる檀家は仏のごとしと、瑩山禅師の教えをひたすら実践した。

すでに派遣留学僧は九ヶ国二十二名となつてゐる。平成元年度もすでに五人が決定した。留学僧たちはみな誓願を背負つて立つ、厳選された真面目で優秀な学僧ばかりだ。宗派も国籍も男女も問わない。

師は、自分が六十歳になるまでに百人ぐらいは送れるであろう。そのうち一人でもいい世界に通ずる人が出るならば、と願う。かつて百人に十人ぐらいは、と言つたら高田好胤師が、それは欲張りだよ、お釈迦様でも五百人中十人もいなかったのだから、と言われたそうだ。

師の決意の程を紹介しよう。

——不安と絶望の危機に瀕した現代の社会ほど、釈尊の教法宣布を必要とするときはありません。

日本は、世界最大の仏教国でありながら、仏教界は、遺憾ながら直接収入につながる仏事を司ることが寺院の大きな目的であるというふう
に受けとめているのが現実で、世界の大勢に即
応して教化の実をあげる態勢に欠けておりま
す。宗派仏教に枝分かれた現在の日本では、
信仰の対象や教義がそれぞれ異なるために、各
宗派が一丸となつて事に対処するにはどれだけ
待つか。滅びの道を突き進むその速度を少し
でもゆるやかにするために一人でも多くの人が
力をあわせて、いしづえを築きたい。私は、新
寺を建立した初心に立ち還つて、本当に人を育
てるための海外留学僧派遣というこの大誓願を
成就しようと発願いたしました。

(宗教新聞第一三七号から転載)

くらしの中で読む『正法眼蔵』

おうさくせんだば
王索仙陀婆の巻　その二

成興寺住職　小倉玄照

索オイオイ

もう四・五年まえのことになりましたか。
私の保育園に二才を過ぎた男児T君が入園して
来ました。ところが、このT君、いささか多動
の傾向があつて行動に落ちつきがありません。
しかし、何よりも私たちを心配させたのは、入
園後、一カ月経つても殆どことばらしいことば
をしゃべらないことでした。どんな時にも、た

だ「オイオイ」というだけなのです。

もちろん、両親はそのことに気づいていて、
ひよつとしたら脳に傷でもついているのではな
いか、と大病院にT君を連れて行き、精密検
査を受けたりしたようです。脳に傷がつくなん
てことはめつたやたらにあることではありませ
ん。実際、脳波などの医学的検査では大した異
常は発見されませんでした。

T君には、五・六才離れた姉が一人いるので

すが、男の児が欲しいと念じ続けていた夫婦の間にやっと念願かなって授けられた男児でした。祖父母も、両親も、目の中に入れても痛くないほどに大切に育てたようです。喃語が発声できる頃、自分の要求を「オイオイ」といえば両親も祖父母もそのもとめるものをおしはかつて、それそれそうかそうかと下へもおかぬように対応したようです。まさに「王索仙陀婆」ならぬ「T索オイオイ」です。両親や祖父母は、さながらに可愛い王様T君にかしづく家臣たちという家庭の様子が目に浮かびます。

このT君の親に対して私どもは忠告しました。「オイオイ」と云っただけで、水をやったり、おやつをやったりしないようにしなさい。「水」とか「おやつ」とか、或いは「ご飯」とか、カタコトでもいいから自分の欲しいものを言葉に発するよう仕向け、そういう努力の成果をある程度認めて後に、初めてその要求を満たして

やりなさい、と。

家庭内で、そういうように努めてT君に接し始めると、しばらくしたら、彼は必要に迫られてカタコトをしゃべりだし、やがて間もなしに同年齢のこどもたちと同じように会話が出来るようになりました。

智慧を磨く

王と臣という二つの立場を比較してとやかくいうのは、仏法とはなじまないことです。しかし、権力者の王はかなりわがままにふるまうことが可能ですが、王に仕える臣は、自己を相対に抑制しなければその任を全う出来ません。

そういう意味では、もし生まれ落ちた時から、王として常に仙陀婆をもとめ、苦もなくそれを得るような生活ばかりしている者は、所詮「奉仙陀婆」の智慧を身につけることが不可能だと申してよいでしょう。



「索仙陀婆」する王に対して、的確な「仙陀婆」を奉るのは、「有智の臣」であつて初めて可能です。「索オイオイ」する丁児に対して、水やおやつやら、或いは抱っこやらおんぶやら、とその状況に応じて望みをかなえてやれる祖母たちは、かつて厳しい生活環境の中で、そのような智慧を磨いて来たということも出来ま
す。ある意味では「有智の臣」の要素を身につけているのです。しかしながら、幼い時からこういうふうな「索オイオイ」で育つた方の子は迷惑なことです。決して「奉仙陀婆」の智が身につかないのではないかと予想されるからです。

このように考えて参りますと、道元禪師がここで問題にしておられる「智」は、このごろの学校教育などで問題にする「学力」などとはいささか趣きを異にすることがおわかりでしょう。「学力」は、いふなれば言語によって修得し

た知識が中心になるのですが、「奉仙陀婆」の智は、大自然と一体になつて生きる厳しい生活体験の中でたくましくして身につけたものなのです。中々に自己の思いどおりにはならない状況の中で、いつしか身につけた一種の勘のようなものが大きな比重をしめた智と申したらよいかもしれません。

禪門では、「不立文字」とか「教外別伝」とかいうことを強調します。文字や言語によって修得した概念的な知識にふりまわされて生きることを否定的に考えるのです。師に対しては、常に理屈ぬきの勘で反応することが求められたのです。禪門の修行の要諦は、そういう勘をいかにしてわがものにするか、というところにあつたと申してよいでしょう。まさに「奉仙陀婆」の「智」を備えることは、禪門の修行の極意とも言えるのです。

行脚で鍛える

では、具体的にはどういう修行をすれば、「奉
仙陀婆」の「智」が体得できるのでしょうか。

師の心にとっさの勘で反応して誤ることがない
ようになるのでしょうか。その点について、道
元禅師は、

「さらに草鞋を買ひ行脚すること進一歩して始
めて得ん」

と、一つの方向を指示しておられます。行脚
というのは、各地の禅院を尋ねて修行をするこ
とです。つまり、わらじを履いて旅に出てみる、
と云われるのです。

そこで思い出すのが『従容録』は第二十則の
「地蔵親切」という公案です。中国は福建省の
地蔵院に住した珪深和尚（八六七一九二八）が
主人公です。（一）内に会話部分の拙訳を示しな
がら、本則を紹介しましょう。

地蔵、法眼に問ふ、「上座何くにか往く」（お
ぬし、どこへ出かけるのかね）

眼云く、「遙邈として行脚す。」（あちこちに
とどまりながら修行の旅に出ます。）

蔵云く、「行脚のこと作麼生。」（修行の旅を
何と心得ているかね）

眼云く、「不知なり」（見とおせません）

蔵云く、「不知、最も親切なり」（見とおせ
ないというのは、最も親切なことだ）

眼、豁然として大悟す。

法眼は、法眼宗の開祖である法眼文益（八八
五一九五八）のことです。地蔵（珪深）の弟子
です。この会話の眼目は、もちろん「行脚」に
あります。各地をただ一人で遍歴して歩く行脚
が、なぜ人間を鍛えるのか——それがここでは
問題になっています。それに対する答は、
「不知」。いろいろに解釈できそうですが、『学

研漢和大辞典』の「知」の意味として「しる—
物事の本質を正しく見とおす。ずばりと当てる。
感覚や判断・記憶などの働きを含めていう。」と
あるのを参考にして、「見とおせない」という訳
をしてみました。何が起るか見当もつかない
——それが、かつての行脚の本質であったよう
に私は思っているのです。

旅を現代に生きる私どものイメージで考えて
は誤ります。

「可愛い子には旅をさせよ」

ということわざに象徴されているような昔の
旅のことなのです。

「旅は憂いもの辛いもの」

というのが、昔の人にとっては、共通の認識
だったのです。旅が、しばしば人生の比喩とし
て語られたりするのは、行き先にどういう事態
が発生するのか、殆どその見通しが立たないか
らなのです。

冷暖房完備の汽車や自動車で、殆ど計画どお
りに、いたって快適な旅が可能で現代の旅行と、
昔の旅とは、まったく異質なものであったのです。
もうかれこれ十年前のことになりますが、私
の寺で「小僧安居」という行事を持ったことが
あります。学校の夏休みを利用して、小中学生
の寺院子弟を五・六人集め、一週間ばかり昔の
小僧のような生活をさせてみようという試みて
す。

その時、私は参加する子弟の親御さんに、一
つの条件を出しました。それは、参加者は汽車
で、付添なしにやって来る、ということでした。
名古屋や大阪から、或いは博多や岡山から、子
供たちは一人旅を経験しながら、私の寺へやっ
て来ました。「小僧安居」は、このたった一人で
汽車に乗り、見知らぬ寺へやって来て一週間ば
かり生活するということで、目的の半ばを達し
たのだと、私は今でも思っています。

今、子供達の自立が充分できていないのではないかということが社会的に問題になっていきます。その原因は、大学入試の時にすら親が付き添って行くのが珍しいことではなくなつたといふことに象徴的に示されています。子供に一人旅を経験させることがなくなつたということが大問題なのです。

法眼が行脚した中国大陸の山河は、想像を絶するほどに広漠としたものでした。そこをただ一人、幾日も幾日も歩きつづける旅を思うてごらんなさい。猛獸やら、或いはよからぬ奴やらが突如現われて危害を加えようとするかも知れません。病氣や怪我をしても、医者などはありません。自分だけがたよりです。まさに荒涼たる大自然の中を大自然と呼吸を合わせながらただ一人旅を続けていくのです。文字通り「不知」の世界を生き続けると申してよいでしょう。そういう中で体得した智慧こそが大切なのです。

師が弟子に何を求めているか、弟子が師のころを正しく読みとる勘のようなものは、そういう生活の継続の中でいつの間にか我が身に備わってくるのです。

親と子が望ましいかたちで心を通わせあえるようになるためには、おたがいがやさしく接触しあうというだけではどうも不十分なように思えます。豊かさの中で、子に「奉仙陀婆」の勘を育てるためにはどうしたらよいか。私どもは、真剣に考えなければならぬようです。



インド留学記

その8

出版記念

パーティー(2)



師範学院講師
師範大学講師
駒園
阿部 慈

4

バンダールカル研究所のゲストハウスは、ニザムズゲストハウス(Nizam's Guest House)とも呼ばれます。ハイデラバードのニザム王が多額の資金を出して建立し、研究所に寄進したところからその名があります。かつてのインドの王様(マハーラージャ)は大きな力があつたことがしのばれます。

このゲストハウスは二階建てで、都合八部屋

あります。中村元先生やハーヴアード大学のインゴールズ先生など著名な先生方がプーナを訪れたときに、このゲストハウスに宿泊されました。現在でも、二、三人の日本からの研究者や留学生が、欧米よりの研究者とともに滞在し、勉強に励んでいます。わたしもここに都合四年間住みましたので、とてもなつかしいところです。

このゲストハウスのメインホールは、第二次世界大戦直後、プーナ大学がボンベイ大学から

分離独立するさいに、一時、プーナ大学の本部でもありました。その旨を刻したパネルがメインホール入口に掲げられています。それで、バンダールカル研究所の職員たちは、

「プーナ大学（といっても大学院大学ですが）の草創期はわれわれの手によって作られたのだ」

と、胸を張ります。

5

このニザムズゲストハウスのメインホールに、わたしの学位論文出版記念を祝して、七〇名ほどの人々が集まってくれました。お世話になった大学関係の先生方、アメリカ・ドイツ・カナダ・日本などからの留学生、バンダールカル研究所の先生方・職員一同、それに下働きのピューンたちでした。

インド人（ミスター・ダムレー）の奥さんに

なっている里子・ダムレーさんが、六器の生花を美しく生けてくださいました。小さな日本が、来臨の人々の目をしばしなごませてくれました。インドティーとスナック（ビスケットなど）、それに少々のブドウがふるまわれました。七〇名に二〇〇ルピー（当時の邦貨で六〇〇〇円）の予算でしたから、その程度のことしかできませんでした。しかし、日本では考えられないほどの安さではありました。

6

先生方や友人たちには、御礼を兼ねて招待したのですが、わたしはその種のパーティーには参加できない非バラモン階層のピューンたちをパーティーの席につけさせたかったのです。かれらは、いつも給仕をするか、隅の方に立って、出席者たちの談笑や飲み食いを見ているだけなのです。そして、パーティーのあと、かれらの

残り物を少しづつ分けあって食べているので
す。わたしは、そんなかれらを一度パーティー
なるものに招待したかったです。やせこけて、
目ばかりギョロギョロしているかれらと同じテ
ーブルに着いて茶が飲みたかったのです。

しかし、パーティーは、会場の広さと給仕人
の必要性ということから、七〇名が一同に会す
ることなく、三回に分けてなされました。第一
回目^が先生方と留学生たち、第二回目^が研究所
職員とプレスの連中たち。ピューンたちは遠慮
した、ということもあったのでしよう、結局メ
インテーブルには着きませんでした。

しかしながら、サイドテーブルで、ビスケッ
トをほおぼりながら茶を飲んでいた研究所夜警
のガムパット（花^{はな}作^{つく}師^しカースト）のほほのゆる
みが、ブドウの一房一房を口に運んでいたゲス
トハウス・世話係のトプター（農民カースト）
の目のやさしさが、今も思い出されてなりませ

ん。

7

一八〇ページの小著は、恩師ババット先生に
捧げられました。コユナツツとブーケ（当地で
はグッチという）を添えて。八十七歳の老大学
者（今年九十六歳を迎えられる）に捧ぐには、
いとど拙いものではありませんが、先生は鳩の
ような目をなごませて受けてくださいました。
わたしの心には、七年の青春を燃やし尽したと
いういささかの感慨^があり、それが思わず知ら
ず、ほほに熱いものを流させました。

ミセス・ババットには、オーランガバード・
シヨールとコユナツツを手渡しました。師（グ
ル）は弟子に直接「法」（ダルマ）を教示する^が、
グルの夫人は間接的に（例えば、お茶やお菓子
などをふるまうことによって）面倒を見るので、
弟子の学業^が修了したときには、シヨール（三

○ルピーくらい）を奥様にプレゼントするのが
当地のならわしとされるのです。シヨールとコ
コナツツを手渡したとき、夫人はいささかの驚
きと慈しみをこめたまなざしで、わたしをじっ

と見つめてくれました。本年八十八歳になられ
るはずです。
(つづく)



インド留学記

その7

シク教の祈りの根底 にあるもの



東 方 研 究 会
研 究 嘱 託
保 坂 俊 司

前回紹介した暗やみの神秘体験が私の人格を変えたなどという大げさなことにはならなかったのですが、しかし、この体験がわたしのインド理解に大きな変化をもたらしたことはたしかです。というのも、私はどちらかと云うと物事を機械的に判断する部類の人間に属しており、神仏は敬いこそすれこれといって余り関心がなかったのです。こんなことをいうと宗教を研究する学徒が何を云うのかと叱られそうですが、私自身はそれまで社会科学、特に経済や政治に

ついて研究していたので、その方面の関心が余り育たなかったものでしょう。そして、もう一つの理由は、恐らく曲がりなりにも宗教学を学習したその仕方が、宗教学を理解できる様なものではなかったであろうと、思われるのです。私は以前、恩師中村元先生から「日本の研究者の多くは文献ばかりに拘ってその内容を検討すること、あるいはそこに書いてあることの意味を積極的に考え、自分なりに理解しようとする人が少ないことは多いに反省すべき点ではな



いだろうか。」という意味のことを伺ったことがあります。その時、私はその意味する所を十分理解できなかったのですが、しかし、この一種の神秘体験以来、先生のこの言葉が自分なりではありますが少し理解できるようになったのではないかと思っています

というのも、ある程度宗教を学問として研究する方法を学んだ私としては、例え不可能であるにしても極力主観的な見方は排除しなければならぬと思っていたのです。確かに、この見方は大事であり、それを否定するものでは決してありませんが、しかし、そのみに終始するのは何と無く言語のゲームか、パズルを解いているような味気無い思いがするのは私だけでしょうか。宗教は人間の最も人間らしさが現れたものであり、それを研究するのにあまりに文字やその用法に拘りすぎることは何か大事なものを失ってしまうような気がしてならなかったの

です。私はこんなことを考えながら、納得のいかぬ日々を過ごしていました。それは、恐らく自分の目の前に全く今までの自分の理解を越えた宗教の世界が在ったからでしょう。特に、シク教の聖地アムリツサル、ゴールデン・テンプルと呼ばれるハリ・マンデルでの体験は、私には大きな驚きであり、また私の年来の疑問の解決にヒントを与えてくれるものでした。

私がパンジァブにいた丁度その頃、シク教徒は一部の急進派がインドからの独立を叫び、テロや暗殺を繰り返しており、日に日に情勢は険悪となっていました。戒厳令が敷かれ自由に町を歩くこともままならなかったのです。

私自身も何回か危険な場面に遭遇したこともあり、人々は死と向かい合わせの生活を強いられていました。

昂ぶる人々の心は、その面相にはつきりと現れておりましたし、時々乗る相乗りタクシーで

何度もライフルや拳銃などで武装した人々と一緒にになりました。また暗殺現場にでくわしたこともありました。まさに町は一触即発の状態だったのです。

ところが、このような町の状態をよそに、寺院の中はまったく静寂そのものなのです。照りつける太陽光を反射して金色のお堂が、巨大な四角の池の中で輝いている姿は、一切の動きを飲み込んでしまっているのです。

私はこの静けさに何とも云えぬ神秘的なものを感じたのです。それは、寺と町を明確に分ける分厚い壁という物理的な隔たりではなく、精神の隔たりです。武器を持って血走った目の人々が、この空間に入るやいなやみるみる別人のように心の静寂さをとりもどしてゆくのです。

私にはこれは驚きでした。まさに武器を持った鬼のような毛むくじやらの大男が、祈りの場

で見せるその姿は、私が今まで経験したことのない玄妙なものでした。

以来、わたしはこの「祈り」ということの意味を考えつづけています。

シク教では、この祈りを非常に重要視します。勿論、どんな宗教でもそれは同じともいえませんが、しかし、シク教徒の祈りは他とちよつと違つた意味があるように感じました。そこで、私は彼等の祈りについて色々研究することにしました。

詳しくは、次回に紹介することにしますが、その一端を紹介しましょう。

シク教では聖典『グラント・サーヒブ』が、生きたグル（教主）として崇められます。従つて、この聖典を朗唱することは、シク教徒にとつては特別の意味があるのです。シク教には、この聖典を輪番で昼夜を問わず読み続ける宗風があります。彼等をグラランティーと呼ぶのです



が、彼等はこの四〇〇年間にたったの七回しかこの行を休んだ事がないのだそうです。そして、つい最近ではインド政府軍によるゴールデンテンプル襲撃（？）の時1週間休んだだけだといえます。その執念ともいえる祈りへの思いはなんなのでしょう。次回から検討して行きましょう。

エッセイ

家の内と外

インドでは女性が一人で自由に出歩くのは、まだ一般的ではない。デリー大学の某教授は自ら買い物カゴをさげて市場に行かれていた。旅行にいたってはなおさらである。お世話になっていたインド人家庭の奥様たちも、特に用事がない限り家で過ごすことが多いように見受けられた。ただ夜はあちらこちらから招待を受けて、仕事を終えたご主人たちと一緒に外出していた。

ある時、子守り（アーヤー）に子供を預けて若夫婦がクリケットの試合を見に行った。次の日の朝食の時に、二人は家長であるおじいちゃんに叱責されていた。小さい子がいるのに、特に母親が夜出かけてしまうのはよろしくないというようなことだった。インドはなかなか大変だという思いでお小言を聞いていた。このような環境の中で渡印直後の三週間は、家族と家の生活しか知らなかった。



東方研究会専任研究員
清水晶子

いよいよこのお宅を出て寮生活を送ることに
なった。ここまでこぎつけるのには、相当の紆
余曲折があった。入寮希望者の受付は、例年新
学年のはじまる7月中頃までには終了してい
る。それに間に合うように、4月に在日大使館
で学生ビザの発行を受けてから、同時に大使館
を通じて寮の部屋の申し込みをしておいた。と
ころが、待てども待てどもナシのつぶて。ビザ
は発行されてから入国まで6カ月の猶予しかな
い。心配になって、その間に数回大使館からテ
レックスを打ってもらった。インド政府の奨学
生には優先して部屋を割り当ててもらえると聞
いていたが、話が全く違う。ビザの入国期限が
切れるぎりぎりまで待ったが、住む所が決まら
ないまま思い切って渡印することになった。

N教授の紹介状を持って、一度東京を案内し
たことがあるという面識だけどころがり込んだ
のが先のジャイナ教徒―ジャインさんのお宅だ

った。今思うとかなり大胆な行動だったと思う
が、心細く思っていた私を暖かく迎えていただ
いて、本当にありがたい思いで一杯だった。

そして、ジャインさん一家の経営する書店の
顧問をしているデリー大学の元事務局長だった
人が文部省、寮監、留学生課にかけ合っ下さ
って、何とか相部屋ながらも寮に入ることがで
きた。後で伺った話によると、どこでどうなっ
ているのか日本から何度もテレックスを打った
にもかかわらず、一切そういうものは寮監まで
届いていなかったという事だった。初めての
ことだっただけに、この話にはさすがに啞然と
なった。その後、この手のことにしよっ中出く
わすことになって、とにかく大事な用件の場合
には、必ず本人が直接出向いて話をしなければ
ならないということを思い知らされた。それと
もう一つ。インドで物事をうまく運ぼうとする
際には、「トップダウン方式」を採用した方が有



ジャイナ教のお寺

効だということもわかった。

それで、文部省の奨学生担当の人には留学中何かとお世話になった。何か問題が持ち上がる、すぐ文部省まで出かけて行って苦情を聞いていただいた。一留学生に対して「日本から一人来ていろいろな心配事もあるだろうから、私を父親だと思って困ったことがあったら、いつでも相談にいらっしゃい」と言われたことばが、今も忘れられない。

寮に入るまでは右も左もわからなかった私^が、まがりなりにも一人で何とかやっていけるようになったのは、入学手続きの書類を手にキヤンパスのあちこちのオフィスをたらい回わしにされたことや、文部省まで直談判に行くようになってからであった。困難な問題を処理しなければならぬような時には、必ず手助けをしてくれる人が現われて、いつもうまく切り抜けた。それはきつとインド人の大好きなこと



ジャイナ教のお祭り会場で

ば、「神様のおかげ」に相違ないと思っ
ている。それにインドでは女性にと
って制約も多い代わり、意外に
(と)いっては失礼かも知れない
が)レディー・ファーストの精神が
ゆきわたっている感があり、親切
を受ける機会が多かった。

居心地のよかったインド人家庭
を出て、こわごわの世界に漕ぎ出
した時、思いの外周囲の人々は優
しかった。寮で生活するにあたっ
て奥様たちから生活全般の事に関
して諸注意を受けたこともあり、日
本との習慣の違いにははじめは、
今思うと慎重になり過ぎたかも
しれなかったが、しだいにいろい
ろな人につき合うようになり、行
動範囲も広がった。日々の体験を
自分なりに受容しながら、少しづ
つインドの社会にとけ込んでいけ
たように思う。

「21世紀の仏教と私の役割」

——ユーロ・ブダイズムの形成——

愛知学院大学文学部宗教学科講師 引田弘道

昭和六四年四月より一ケ年、筆者は愛知学院大学海外研究の好機に恵まれることになった。現時点では、イギリス、オックスフォード大学にて、学問の研鑽をする予定でいる。従来の筆者の専門とする領域はインド学である故、当大学に於いても、この領域の専門家である、Richard Gombrich 教授、Sanjukta Gupta Gombrich 博士、Sanders 氏などに師事する予定である。インド独立以来、イギリスに於けるイン

ド学は漸々に退歩しているとはいふものの、輝かしい伝統は、膨大な写本の集積並びに、PT S の活動により、絶ゆることなく連綿と続いている。

このような学問分野に於けるインド学、仏教学の蓄積は、必然的に、仏教を個人的体験のものとして経験的に受けとめようという風潮に展開していった。数年前、オックスフォード大学で研究された、駒沢大学片山一良教授によると、

同大学内には、Oxford University Buddhist Society という名の協会があり、学内関係者のみならず、学外関係者も自由に参加して、活動の輪をひろげているらしい。その活動内容は次のものがある。

Samatha meditation classes

Meetings — Buddhism and Resolving Stress

The Way of Mindfulness

Buddha nature : How it relates to Meditation.

Zen Practices

これらの活動の内容は、南方の上座仏教、日本の禅、チベット仏教が主であるとされる。この傾向は、また同大学内の協会ばかりではなく、ヨーロッパ全体についても言えることが、最近前田恵学博士によって報じられた。博士は五十七年の夏、イギリス、ドイツ、フランス三国を歴訪され、各地で実践されている仏教の形態を

つぎさに調査され、今やヨーロッパには、「ヨーロッパ人の、ヨーロッパ人による、ヨーロッパ人のための仏教」が根付き、確実な成長をみせていると報ぜられた。その報告は、前田恵学「ヨーロッパ仏教の成立-Eurobuddhism - Eurobuddhism-Eurobuddhismus」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』創刊号1 (19頁)に詳しく掲載された。博士は『ヨーロッパ仏教史』なるものが今後書かれるとするならば、第一章は「ヨーロッパへの仏教の伝来」、第二章は「ヨーロッパにおける仏教の発展」、そして第三章は「Eurobuddhism の成立」となるであろうと、予測されている。確かにこの順序は、中国仏教や日本仏教の歴史的潮流と符号するものであり、ある意味で得心のいくものである。では、さきに述べた、南方上座仏教、日本の禅、チベット仏教のどれが、「ヨーロッパ仏教」



としての発展の基台となっていくのであろうか、あるいはこれら三つの仏教が混然と一体化して基台となるのであろうか、という素朴な疑問が生じる。これらの仏教に共通することは

- 一、独身主義であること
- 一、瞑想を重視すること
- 一、自己の心を主眼として、自己以外の絶対的他者を立てないこと

キリスト教という恩寵型の宗教に満足しない

彼らが、これらの共通点をもつ瞑想型の仏教に興味を抱いたのは当然であるが、では、三者の仏教のうち、どのスタイルに統一されるのか、現在のところそれは確定していない。教義的にも、あるいは文化的にも異なるこれらの仏教のうち、どれが一番ヨーロッパ人の好みに合うのが大変興味のあるところである。筆者はかねがね、仏教とはなにも一部のエリート僧の集団から成立するのではない、という考えの持ち主である。原始仏教以来、仏教を構成するのは、出家者である比丘、比丘尼と在家者である優婆塞、優婆夷の四衆であった。在家信者による布施によって修行者たちは露命をつないで、悟りを求めたのであり、絶対に行者自身で自給自足をしていたのではない。禅において、作務さむという概念が成立したのは、中国仏教からである。原始仏教において修行者は田を耕すことも、食事を調料することも禁止されていたのであり、彼ら

にとつて在家信者による布施は不可欠な生命維持の手段であつた。これは裏をかえせば、修行者は在家信者と、大小の差はあれ、深い絆をもつていたのである。そこには、土俗的、迷信的な要素も多分にあつたと思われる。仏教を表層部と基層部に二分するならば、教理は前者にあたり、土俗的、迷信的なものは後者にあたるであらう。仏教は元来、その基層部を無視し、排斥することなく、空間的、時間的変遷とともにそのスタイルを変えてきたのである。この考えを、いまヨーロッパ仏教に適用するならば、「どれほど在家信者の心をつかむか」ということが、一番大きな課題となることは間違いない。そのためには、ヨーロッパの習俗に適合することが一番早道のようにである。しかし、日本のように祖先崇拜といった土俗的風習は、他の宗教、土俗的信仰を認めなかつたキリスト教によつて根絶やしにされてしまつてゐる。それ故、これは

無駄な考え方であらう。それよりもむしろ、時間がかかるが、彼らの知性に訴える方法のほうが、より適当と思われる。そのためには、

一、より多くの翻訳とその普及

一、指導者の養成と布教活動の充実

この二点が急務であるように思われる。南方上座仏教の内容は、早くからPTSによる原典出版とその翻訳により、知識人たちの興味をひいてきた。その結果は、南方上座仏教が他の二者を引き離して盛んであるということに現れてゐる。今後、これらの三者の仏教がどれほど、さきの二点に力を注ぐかによつて、ヨーロッパ仏教のスタイルが決定されてくるであらう。日本の禪について言わせてもらうならば、弟子丸泰仙老師以後、燎原の火の如くひろがった、禪の信仰者、修行者たちの求道心を絶やさないうためにも、この二点の活動を絶対に欠如させてはいけない。

「禪の国際化と私の役割り」

——特にアメリカに於ける禪の立場と私の役割り——

大本山総持寺祖院 村 畑 亮 一

昨年、北米羅府の禪宗寺が創立六十五年を迎えた。アメリカに禪が根をおろしてから六十五年が経った訳である。達磨大師が印度より中国へ禪を伝えてから千五百年。さらに高祖道元禪師が中国より我国へ正伝の仏法を伝えられてから八百年近い歳月が流れている。その深い長い歴史に比ぶれば、アメリカの禪はやつと今、黎明期に入ったばかりと言えるかもしれない。

考うるに、彼らの大多数はキリスト教徒である。幼い頃に洗礼を受け、神の教えを受け育つて来た人々である。つまり、絶対的な神への「信」

の宗教の下で生きて来た人々である。「信」という事では、キリスト教は最高の宗教であるという人もある。

山田霊林師は、『禪とキリスト教』の中でイエスが十字架にかけられた際に残した一句「神は私を見捨てたまひしか」をひいて、この時にイエスは、自分の運命を黙って見つめる神の姿を見、改めて自己の信心を確立したのではないかと述べられている。私自身、何故キリスト教の信者が、自分らの教祖の、かくも残酷なる姿である十字架を、宗教の象徴とせねばならないの

海外派遣僧の辞令を渡される村畑氏



かという疑問は常々抱いていたが、これは山田
霊林師の言われるように、「信」の象徴なのであ
る。誰もがいつかはぶつかるであろう、神への
不信心。それを超えた処に絶対的な「信」があ
るといふことのあかしなのである。まさにキリ
スト教は、神への「信」の宗教である。

そうした中で生活してきた彼らが、何故キリ
スト教とは対照的な仏教に傾倒してきたのであ
ろうか。釈尊の教えは、他に依る事なく自己に
依ることである。絶対的なのは、他ではなく、
よくととのえし己れなのである。

次に仏教は、「苦」を観ずる宗教である。最初
にこの世は苦に満ちているということを見きわ
める。いわばマイナスからの出発である。そう
言った意味では、キリスト教の「世界は美しい」
ということとは対照的である。しかし、マイナ
スからの出発、底辺からの出発故に、そこから
はもう落ちようがない。向上するのみである。

私の教化研修所時代の同期であり、現在禅宗寺で活躍中の黒柳博仁師のアメリカに於ける半年間の研修レポートには、前述したようなアメリカの参禅者の生々しい声が聞かれる。彼らは皆、切なる苦悩を持っている。その解決の糸口を坐禅に見出し飛びついたのである。それは発心と言っても過言ではないだろう。発心の故の坐禅であるから、彼らは何らかの道（開設へ向かうヒント）を得るのである。彼らが人生に迷い、疑問を抱き、坐禅でもしてみようかと思つた時、すでに己れの仏性の呼びかけに応じているのである。坐禅は仏が仏を行ずることである。「ホトケ」とは彼らにとつては抽象的かもしれないが、つまり、不完全（本来完全であるのに、それに気付かないという意味での不完全）な私（私）が、完全（ホトケ）に憧れ行ずることである。憧れというのは、目的とするということではない。これもまた、本来の自己からの呼びかけである。

金沢の大乘寺の板橋興宗老師に次の言葉がある。

「私たちは仏教者である前に一個の人間である。坐禅人である前に、大宇宙に息づく一人の自然人である。その人間が、人間らしくまともに生きる教えが仏教である。その内容を直接に実証するのを坐禅という。」

これはすなわち、現代の宗侶への警鐘である。つまり、釈尊や高祖の教理を尊ぶあまり、宗門の坐禅が特別のものであるかのように考えられているのである。坐禅は、理屈ではない。教理は重要ではあるが、それよりもまず座ることである。マラソンランナーが、コースのデータを頭に入れることよりも、まずそこを走って体で覚えこむのと同じである。教理は自分がやっている事への意義づけでよいと思う。そうしないと頭の中で坐禅というものを理解し、実践に向かわなくなるであろう。更に坐禅は特別なもの



ではない。普遍的なものである。一切衆生が仏性ならば、国境、人種に関係なく、普く仏を行ずるべきであらうし、仏の教えに触れればそうせずにはおれないだろう。

その実証がアメリカに於ける禪の普及である。先に私は、アメリカに於ける禪が黎明期であると述べた。黎明期であるからこそ若木が天地いっぱいに拡がるような勢いがあると思う。私はそういう所に飛び込んで、彼らとともに坐り、彼らとともに仏道を学んでゆきたい。

繰り返しになるが、我々は本来、仏であるが故に、常にその真の自己に戻ろうとするはたらきがある。問題はそれを意識するかしないかである。そこに気付いて参禅に来た人々に道を指し示す事が私の役割りである。もちろん釈尊や高祖さまに代わるものではないにしろ、仏祖の真の教えを説いてゆくのが私の務めであると思っている。

「タイの仏教に学びたいこと」

山本 浄月

何時の頃からか私は「上座部仏教」と言うものを垣間見てみたいと思いはじめていた。現在それにかなう所と云えばタイ国やビルマ等がその伝統を比較的色彩濃く残している様にみえ、そして何とかしてタイ国の寺院にて体験する方法はないかと思いを持っていた。

なぜなら私は出家した身であり、仏道を行じてゆくことが私の生きる道であり一大事であり、この道を私なりに出家者としてしっかりみつめ、はつきりとその立場をつかまなくてはな

らないと感じた。

なぜかと云うとこれは私が出家して以来、色々と体験してゆく中に心におき上がってきた事であり、結局、釈尊の原点に一先ずどうしても立ち返って自分を出発させなくてはならないと思っただからである。

そこでさてどの様にしたらよいのかと考えると、出家者としての仏教を行ずる形態が初期の仏教に少しでも近い形を保っているのではないかと思われる方向へさかのぼらなくては仕方が

ないのではないかと考えたのがはじまりである。

勿論、日本に中国を経て北方系の仏教としてもたらされた大乘仏教を否定するものではない。それはそれで非常に発展し、ある意味では水平化されたすばらしいものであると思うし、又、我々もその中に居るのである。そして私は仏教が好きなのである。その故に私はその道をゆくべく出家を果たして幸せだと思っている。それは釈尊の教えに帰依したからである。

ところが日本に於ける現代の仏教、正確に云えば仏教集団なり教団、又は僧侶のあり方に首をかしげることが多い。果たして本当に仏道を行じていくだけの悲願を持ち得ている境涯にあるのであろうかと思うのである。

もちろん修行深き心涼しげな非常にすばらしい立派な方もお見うけする。そして心から尊敬の念を持っている。

然し、全般を眺めていると何か「これでよいのか？」と云う思いに陥るのである。

出家者はやはり出家者としての生き方があり、一般在家の人にとつての精神的規範を持たなくてはならないと思う。たとえ大乘の精神と云えども、俗に落ちた出家者では所詮無用の長物化し世の中に存在価値すら失い、僧侶イコール葬儀のイメージになりかねない。仏教とはもとと葬儀に関係があつたわけではない。まして現在の世相は葬儀社が僧侶を適当に使役させかねない有様である。やはり何かがおかしいのである。このままでは新しい世代になったら仏教ばなれして縁なき衆生となりかねない。二、三十年もつかどうかである。

仏教は死んだ人とのみつき合うのではなく、生きている人々ともっと日常においてつき合うのではなくてはならないと思う。

仏教が教えであり宗教であるならば人の心を

救うものでなくてはならない。そして、僧はそのために存在しなくてはならないのである。「生老病死・一切皆苦」、人の生きる世がつらい故に釈尊がそれよりの解脱を求めて悟りへの道を発見して下さったのであり、それが仏教として発



展してきたわけである。生きてある人々のために仏教は存在し、人の世をお互いに少しでも調和をもって生きるためにも、自らなるものを戒とし他動的なものを律とし、「戒律」が規範となつて仏教集団が形成され、その流れが約二千五百年も様々に発展されてきた。それは釈尊の説かれた真理が偉大であるからである。それを専門的に行ずるために出家するのが僧であるはずである。その真理に身をもって行じてゆく生き方をきびしく守ろうとするが為に僧は尊ばれて信仰を助けるものであるはずである。人の心に信頼と安心をもたらすだけの道力を持たなくてはならないであろう。それが専門家としての僧侶の布教である。

僧として生きるべき為には、仏教としてのなるべく原点に近い姿をはつきりと把握しておかなければ何のために出家したのかわからなくなりそうである。

私は臨濟宗妙心寺派に僧籍を置くものである。無論、禪堂での坐禪、公案の參禪、作務等の修行も意味があるし、すばらしい境涯へ導かれる道すじでもある。それも釈尊にまみえるための方法である。私にとってはこれらの体験は大変幸運であり喜びであり有難く大切に思っている。そしてまたまた続く修行の道と心得ている。

そこで私はもつと知りたいのである。学ばたいのである。インドに発してシルクロードを通り中国大陸を横断し朝鮮半島を経由してきた仏教。それは様々な風土の匂いもつけてやってきて、島国日本を一応ターミナルとして花開いたものである。そして最も大乘仏教的に花が咲いたとも云える。

特に明治以後は僧侶はあまり一般と変わらぬ生活のように見える。家庭生活をするのが普通になった。出家していないのかもしれない。この大乘の開花ぶりは中国、韓国の人々にとって

はいまだ卒倒しかねないショックの一つのようである。その様なことは私にとってははいかんともなしたがたいので「ノーコメント」である。枝葉の問題としておこう。何れにしても尼僧は今のところ家庭を持たず結婚を放棄して出家しているのだから。故に身軽でどこに行こうと家に執着もなく、ボロを着て貧しく生きてても何の煩いがないのがありがたいと思っている。

そこでタイに於ける「上座部仏教」、「小乗」とも大乘の方で云ったのであろうがそちらも見なければ片手落ちの気がする。革新、改革されたものでもその元になるものがあつたはずでありルーツがあつて存在するものである。全体的にみようとすると「温故知新」が必要である。

保守的仏教と云われても古い伝統を守って続いてきたことはやはり尊い。そこにはやはりきびしいものが存在するはずである。

少なくとも改革派に走らず長い間、釈尊の時



代に近い形で教団を守ってきたものこそが変動はげしいよるべき混沌の時代に儼然たる出番であるのかも知れない。

おくればせながら僧となつたからには僧侶の生き方をもっと学びたい。それ故に一応は出家至上主義？的集団に身をおいてみたいと願うものである。

今や仏教もヨーロッパ、アメリカ等にも伝播しつつある。日本にも求道者はやってくる。そういう人達にしばしば出会う。自分の今迄の宗教を捨ててとり組もうとする人達は真剣である。その時それらの人に対するに確たる出家の姿勢を持たなくてはやはり恥しい。それは日本の一般大衆に対しても全く同じである。

そのためにこそ私はタイに於ける仏教教団にその片鱗をみようと願うものである。それも私にとっての求道となるのであろうか。

タイに於いて色々と学んで来たいと思う。

「未来社会の仏教と私の役割」

東国大学大学院 茂松性典

釈尊が説いた八万四千の法門は、時間と空間とを自在に円満せしめた真理の教えである。

印度に興起した仏教は、印度宗教をその淵源として、北方仏教と南方仏教とに伝道され、その教えが伝派した地域の習俗、気候、文化、土俗宗教などと混合されて、特異な仏教文化を形成したが、これは時空を超越するものであって、真理を正道した教えなればこそとうけ止めることができない。

四諦八正道を覚知して、森羅万象を根本分析

したうえで、人間の生命の本質を覚解した釈尊の教えは、時節と場所の条件に臨機応変する真実不変なるものであって、苦集滅道の要体を示して、機根相應に説示されたものである。このゆえに、言語や思想の表現の変遷は見られても、仏教の生命自体の持つ根本義は全くとして不動であるといえよう。

そして、この見地より立って、未来社会の仏教を捉えたうえで、私の役割を考えてみれば次の様になると思われる。



① 未来社会は現在社会よりも、物量的な生活慣習が顕著となり、事物に対して快適度や便利度が追求されるが、その反面、精神的な生活レベルが低まり、人格の劣等性が目立ち知的行動が実践できないために、善的現象よりは、悪的要素が累積するため仏教と言えども、宗教的意義が希薄となり、哲学、思想は全く学問としてしか価値が無くなり、信仰や祖先崇拜としてその命脈を保つのみで、儀礼的習慣の継続と社交的要因の強い儀式がおこなわれるのみであろうから、未来社会における仏教は、本来性として特有すべき仏教観を人格内に確立することができず、臨終を接点とする関わりであるところの葬送儀礼としてしか存続意義が満たされないであろう。

② 人間の個人としての社会的な役割は、能力、技能、知恵などの優劣に関わり無く、あくまで本人の意志の働きによるところが、大きく左右

するであろう。従つて、私の役割を仏教的な見地で見渡すならば、先ず、過去としての経歴として中一で比叡山において得度して以来、叡中、叡高、仏教大学を経て延暦寺に三年籠山行した。後、韓国ソウルに所在する東国大学校大学院に入学し、現在は修士過程にて韓国仏教学の新羅時代の元暁大師の研究と韓国天台学の修学をしており、これからの希望は、過程終了に必要な論文を作成した後、博士過程に進学致したく思つています。

機が熟して進学の暁には、上記の修学を含め、日本仏教の展開を韓国に紹介する事に努めたいと思ひ、先生方や大学院生に日本の書籍を提供し、韓国でも注目されている日本の禪の正法眼蔵を部分的に翻訳して韓国訳書籍を出版することや、天台学の書物を紹介することで、私の留学を意義あるものとし、ハングル語に通じることができたことをいかして、今後の日韓仏教の

交流に際し通訳や交流大会の進行に協力したいと考えています。

③上記の①②を踏まえて、未来社会の仏教と私の役割を論じるならば、仏教的文化がインド、中国、韓国、日本というように伝来した経路をたどると東国へと進路をすすめていることが知られるが、この東国とは、まさに日本と韓国とを指すものであろう。即ち、仏教の現在の意義はこの両国において開花爛漫として咲き乱れているのである。

これは仏教儀礼が繁栄しているのみでなく、人心が諸要素を介在して、慣習、教育、社会理念、民族性等を、仏教精神によって樹立していることが大きいと考えられる。

現在の韓国社会は変動的に情勢が揺れ動くのであるが、これは近未来において来たるであろう精神的にも物質的にも豊かで安定した社会となるための道程であろう。韓国の未来には絶望

的な物は見られない。

未来における日韓の仏教関係を、観測するならば、韓国より仏教が伝来してより千五百年の重大なる意義よりは、今生きている人々が、根本的に至福となり、宗教生命としての意味ある仏教を目指すことが急務であり、善的体験によって社会悪を退治し、精神的な裏づけによるバックボーンを得て、仏教による人格を打ち立てることが肝要となると思われるのである。



ここで、未来社会と私の役割について、結論的な所見をまとめるならば、釈尊が当時のインド社会において、臨機応変な対機説法をもって、人心を善導したことに倣い日韓において私という小釈迦がいかなる対機説法が出来るのかということであろう。この立場にたって私ができうるすべてのことが、実は小釈迦の役割を果たしていることとなることを私は信じているのである。

「二十一世紀の仏教と私の役割り」

大正大学大学院 韓

京 洙
(韓国)

私は韓国、曹溪宗海印寺の一僧侶であります。

海印寺への入山動機は、大学時代に仏教学サークルに所属したことに起因します。そのサークルでは仏法僧の三宝に帰依し、釈迦牟尼仏の名号を唱え、修禪に励みました。ある日、サークルの先生である慧雲師より、「君は師範大学国文科を卒業して学生たちを教えることより仏法を習って修行し、解脱して、衆生を教化するほうがよいのではないか」といわれ、また、出家を勧奨されました。しかし、その時は父母や兄弟

のことを考え、私は拒否したのでした。その後、サークル活動が活発化し信仰心は益々深くなり、結局、慧雲師に出家することについて相談したのです。師は「上求菩提、下化衆生」のころをお教えくださいました。その時私は、現世紀の仏教者として、娑婆世界の迷える衆生に仏の真理を教え、坐禪と念仏を実践する道を伝えることを決意したのでした。しかし大学を卒業し、すぐ出家することは難しいことでした。というのは、韓国人男性は国防義務につかなく



ればならないからです。軍隊に入って戦争の道
を習わなくてはなりません。しかし戦争は防が
なければなりません。兵役につきながら私は、世
界平和を祈願し、人類に貢献するよう、仏様の

慈悲をもって回向することが正しいと考えたの
でありました。

私は軍の務を終えて後、父母の待つ家には戻
らずその足で海印寺に行き、出家しました。出
家の後、直ちに海印寺僧伽大学に入学して『緇
門敬訓』、大慧宗杲禅師の『書状』、高峰原妙禅
師の『禅要』、圭峰宗密禅師の『禅源諸詮集都序』、
『大乘起信論』、『金剛般若経』、『華嚴経』等を
学びました。僧伽大学を終了した時、学長であ
る宗真先生より「君は日本へ留学して新仏教を
勉強し、その後、国へ帰り、新人僧侶たちを教
えてくれないか」というお言葉をいただき、私
は喜んでそれをお受けし、その年の十二月、海
印寺より日本へ派遣されたのです。

日本に留学してみると大きな相異点がありま
した。日本は小さな島国ですが、人々は平和な
生活をしております。国民たちが熱心に働いて
自由自在に住んでいます。ある日曜日の朝、N

HK・TVを見ると、「心の時代」の番組で僧侶が説法をしておりました。また、道を歩くと看板にさえも仏教的なことを数多く見ることができました。現在の私の国の状況をみますと、ソウル市内ではどこでも教会が建っているのを見る事ができます。また駅では伝道師が「神を信じなさい」と布教をし、キリスト教革命が起こったかのように見えます。それに対して特に一九八〇年頃は、政治的に仏教は迫害に近い圧迫を受けました。このような状況は単純にキリスト教思想そのものと結びつけることはできず、むしろ戦後処理で、強大国が宗教を政治的に利用したと考えることができるように思われます。最近でもベトナム戦争やイラン・イラク戦争など地球上での戦禍は絶えませんが、特にアメリカはベトナム戦争で多くの化学兵器を使用しベトナムの人々に大なる危害を与えたのでした。もちろん我国もこの戦争に参加したので

我国にも責任があると思います。反省が必要なのです。

さて、教会の活動と比較すると、仏教は保守的な思维方法を持っています。僧侶たちは進取な形を民衆に与えることはほとんどありません。これは僧侶自らの勉強不足に原因があると思われる。現在でも韓国の僧侶は山の中に入山して修行し、悟りを求めるだけというパターンが多いのです。こうした伝統的な山岳仏教は、もちろんこれからも重要ですが、一方で現代のような都市型社会においては、いわゆる都市仏教の活動がより重要になるのではないかと考えます。都市の間人は複雑な社会生活の中で宗教的な渴きを感じています。これからの仏教は山から町に下りて、布教と伝道をしなければなりません。仏教は人間の問題点と新しい方向を揭示し、人間に利益をあたえる利他の教えを伝える必要があると考えます。

日本仏教は教学的に現代社会に問題点を提示し、新しい方向をあたえています。善光寺の海外留学僧育英会もまたその一つのあらわれといえると思います。

仏教はインドから出発してアジア各国に、また世界に伝播されています。その形態は国によって相異点があり、むろん日本仏教が全く正しい姿とは思えませんが、世界各国の仏教者たちが集まって相互理解し、愛し、助けあい、世界の平和に貢献をすることが必要であると思われるます。

現在まで私は大正大学大学院において、中国唐末の禅僧、「永明延寿の思想」について研究してまいりました。私は彼の著作である『宗鏡録』『万善同帰集』『智覚禪師自行録』、二十余種を通じて、延寿において浄土教思想がどの様な形で禅の思想と融合されるにいたったかという問題を考察し、一九八六年「永明延寿の禅浄融合

思想」というテーマで大正大学において、修士論文を書きました。また一九八八年七月には、日本印度学仏教学会において「永明延寿の禅浄融合思想」と題する発表をおこない、続いて同年十月「大正大学大学院論文集」第十二号には、「永明延寿の思想」を発表しました。続いて十二月には「韓国仏教セミナー」第四号に「永明延寿の浄土思想」を発表する予定であります。

私は博士論文において、延寿によって鼓吹された禅浄融合思想が、高麗時代いかに展開されたかについて考究する計画であります。

特に、普照知訥(一一五八〜一二二〇)、太古普愚(一二二〇〜一二三二)、懶翁惠勤(一二三二〜一三七六)らを中心として研究し、帰国した後、学僧として東国大学校仏教大学や僧伽大学の学生を指導し、また、一般の人々の啓蒙にもつとめ、日本および韓国仏教に貢献したいと考えております。

日本の英語教育と私の英語力

(その2)



愛知学院大学助教授 島

岩

インドの食事 (一)

——インド風食事作法——

留学の地プーナは、アラビア海に面する西インドの大都市ボンベイから東南東約二百キロほど内陸部に入ったデカン高原にある学園都市で、日本で言えば、仙台か金沢かという霧囲気の都市である。標高六百メートルのところであり、イギリス植民地時代には、ボンベイ総督府

の避暑地となっていたくらいで、夏でも、耐えきれないほど暑いというほどでもなく、インドでは比較的過ごしやすいところであった。私は、その大学院大学プーナ大学のサンスクリット(梵語)学科の特別研究生として、修士課程に在籍し、キャンパス内にある学生寮に住むこととなった。そのキャンパスは、もとボンベイ総督府の避暑官邸があったところで、イギリス風の建物の本部を中心として、広い敷地をもち、

雨期には、庭にブーゲンビリア等の花が咲き乱れるというところであった。

学生寮は、男子寮が三つ、女子寮が一つで、私は、そのなかの最も新しい鉄筋コンクリート作りの第三寮に入った。部屋は、八畳ほどの広さで、ベッドと机、机の横に備えつけの三段の本棚、あとは、洋服を入れるロッカーが一つだった。窓には、泥棒よけの鉄格子がはめてあり、なんだか、刑務所に入ったような気がした。寮費は、一月二十ルピー（約六百円）程度で、寮の食堂の食事は、一日二食で、九十ルピー（三千円程度）であった。

大学院の授業は、午前十一時から始まる。朝起ききのインドの学生たちは、午前五時か六時頃起きて、シャワーをあび、インド・ティーと食パンとバナナ程度の簡単な食事をすませる。そして、十一時前後に、寮の食堂で食事をとる。夕食は比較的遅くて、八時か九時ごろとする。私

は、十時頃起きて、同じように十一時前後に、寮の食堂で食事をとる。寮の食事は、一食とも、インドの定食タリだ。もちろん、野菜の料理だけで、肉は使われていない。タリにも、地方によって、いろいろなヴァリエーションがあるが、プーナのタリはこんな風だ。

食堂の席に座ると、まず、大きめのお盆くらいの大きさのステンレス製のお皿が配られる。その上には、ステンレス製の小さな器が四つ置かれていて、それから、いろんな料理が配られるのである。まず、お皿の下半分には、チャパティ（日本のお好み焼きにふくらしこも具も入れずに焼き上げたようなもの）二、三枚が置かれる。これが、インド人の主食というわけだ。お皿の中央上には、カレーこぶき芋など野菜を汁っぽくなくカレーで料理したものが置かれる。お皿の上の端には、正面に塩、その左右に、生の人参、生の大根、生の胡瓜の短冊切りそれ



ぞれ二、三切れと、巨峰大の小さなレモンとそれより少し大きめの小さな玉葱が一個づつ置かれる。そして、さきほどの四つのステンレス製の小さな器の中には、それぞれ、茄子やカリフラワーのカレー煮などの汁っぽい料理二品とヨーグルトとダル（大豆の煮込み）が配られる。これで、完成である。

食事は、右手で行う。間違っても不浄な左手で食べてはいけない。北インド風の優雅な食方は、親指と人指し指と中指の三本だけ使う。それも、指先しか汚さないで食べる。できれば、小指だけは曲げずにピンと優雅に伸ばしておいたほうがいい。そして、野菜のカレー煮などは、チャパティをちぎって、それにくるんで食べると、手が汚れなくていい。私のように、慣れない者は、指じゅうカレーだらけになり、そのうえ、カレーが指の間から、手の甲にまではみでてきてしまう。これは、汚らしい食べ方の見本

だ。優雅に食べられるようになるまで、やはり、二、三ヶ月かかった。

おかわりは自由だ。チャパティもおかずもなくなると、すぐ注ぎに来る。まるで、わんこそばみたいだ。適当なところで、ヴァス・ヴァス（もう結構）といって、おかわりを断る。また、最後に、御飯があるのだ。御飯は、汁っぽい料理やヨーグルトが配られたのと同じような器で、運ばれてくる。そして、お皿のうえで、ひっくりかえして、中の御飯だけを置いてゆく。置かれた御飯は、本当に、量も形も御飯をっくりだ。「なるほど、やっぱり、仏教は、インドから来たんだなあ」と馬鹿げた感想を持つ。御飯は温かい。その温かい御飯に、ヨーグルト（砂糖が入っていない）やダルやギー（甘味のある液状のバター）をかけて食べる。ここが一番難しい。御飯とヨーグルトやダルを手で混ぜ合わせるものだから、どうしても、手が汚らしくな

る。インド人のように、綺麗にはいかない。

食べ終わると、水道で手を洗い、最後に、出がけにソンプ（うす緑のみがらのようなもので、口をすっきりさせ、消化を助けるそうである）を一口ちよつとつまんでから、食堂を出る。食堂では、インド・ティーが最後に出ることはない。これは、キャンティーン（喫茶）で飲むものだ。

インドの食事（二）

——味覚のオクターブ——

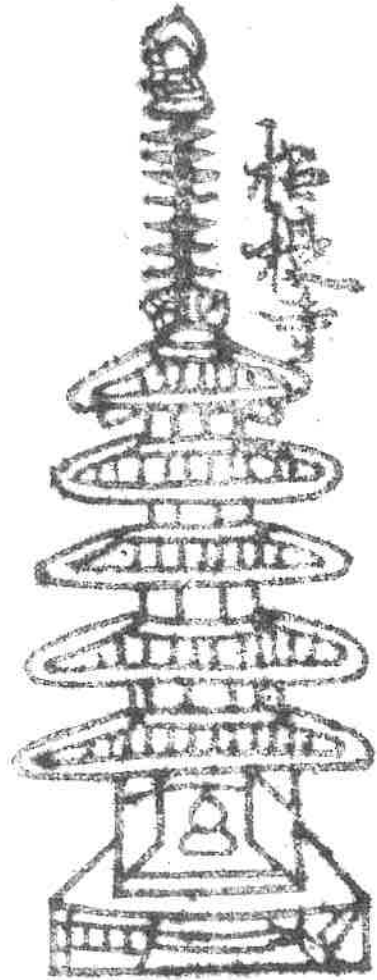
小田実の『なんでも見てやろう』のように、カルカッタの路上生活者と一緒に寝るとまてはいかないまでも、インドに行ったら、少なくとも、インド人の学生と同じ生活を送ろう、と私は思っていた。それが出来ないようでは、インド理解なんてとんでもない、と思い込んでいたのである。それで、私は、学生寮にはいり、毎

日、寮の食堂で食事をし、授業に出るといふ、インドの学生たちと同じような生活を望んだのであった。だが、そのような生活も、残念ながら、三ヶ月程しか続かなかった。

寮の食事のせいで、体にいろんな不調が生じてきたのだ。全く肉を食べないという菜食主義の生活のせいで、めっきり体力が落ちてきた。そのうえ、冬に向かっていたということもあり、昼と夜の温度差が二十度ほどという寒暑の落差の大きさから、とても風邪をひきやすくなっていた。さらには、すべての料理がカレーをはじめとする香辛料で味つけてあるということからくるのだが、毎朝トイレにいくと、便に血が混じり始めた。要するに、痔になったのである。そこで、三ヶ月ほどで寮の食事はあきらめ、まず、外の食堂から、肉料理のはいった弁当をとることにした。だが、それも、辛いことには変わりなかった。そこで、最終的には、自炊にき

りかえることにした。

自炊を始める前は、大抵の日本人と同じように、「インド料理にはただ辛いばかりで味に変化がなく、日本の料理の方がずっと味の変化に富んでいるのだ」と思っていた。インド人が言うように、「ターメリック、唐辛子、胡椒、しょうが、にんにく等のスパイスのブレンドの仕方しだいで、家庭ごとに家庭の味が違うと言われるほどの微妙な味かげんが出るのだ」とは、どう



しても、思えなかった。だが、自炊を始めてみると、まず、「日本の料理の方がずっと味の変化に富んでいるのだ」とは、単純に言えなくなってきた。

いざ、自炊を始めると、味噌と醤油がなければ、日本人はろくな料理ができないという、あたりまえのことにあらためて気付かされたのである。確かに、中国風の醤油やソースは、プーナでも手に入るのだが、毎日食べる料理を作

るといふことになる、それではどうしても駄目なのだ。そこで、みつともなくも、日本から、味噌と醤油を取り寄せることになる。そして、そこで、ふと考える。インド人に言わせると、この味噌と醤油でしか味付けされていない日本料理は、「ただしょっぱいばかりで味に変化がない。インド料理の方がずっと味の変化に富んでいるのだ」といふことになるのではないかと。

事実、日本に留学していたインドの女性は、言っていた。日本の料理には味に変化がないと。一方、日本人は言う。インド料理には微妙な味の変化がないと。しかし、これは、結局、同じことなのだ。インド人の舌は、刺激の強い味の領域で、すなわち、ターメリック、唐辛子、胡椒、しょうが、にんにく等のスパイスの味付けの違いの分かる領域で、微妙な味の違いを味わい分けるのだ。それにたいして、日本人の舌は、刺激の少ない味の領域で、すなわち、味噌とか

醤油の塩味の領域で、微妙な味の違いを味わい分けるのだ。つまりは、育った環境の違いで、もし、味覚にオクターブがあるとすれば、要するに、日本人とインド人では、味覚のオクターブが異なるのだ。インド人は、味覚のオクターブの高いところで反応し、日本人は、味覚のオクターブの低いところで反応する。それだけの違いなのだ。こう思うようになったのである。

それに、インド料理は、その辛さが、胃を刺激するからだろうか。四十度を超す夏の暑さのなかで、げんなりして食欲がなくなつたようなときでも、食べ始めると、食が進むのである。その点では、インドの気候・風土にとっても良くあつた料理であると思う。

このインドの食事から、私が学んだのは、おかげさにいえば、「自民族文化中心主義的なものの味方から離れなければ、異文化は理解できないのだ」といふ異文化理解への基本的姿勢だつ

たように思う。そして、この基本的姿勢は、その後のインドでの生活の中で、次のような考え方へと繋がっていった。すなわち、それは、「日本の文化から見れば、どんなにおかしく思われることでも、性急に判断を下さず、異文化それ自体のコンテキスト（文脈）のなかでよく考えてみることにしよう。そうすれば、異文化自身のコンテキストのなかでは、ちゃんとした合理的な理由が存在しているものなのだ」という一種の信仰めいた考えであった。そして、このような考えをはつきりと持つきっかけとなったのが、インドの友人との「トイレット・ペーパー論争」なのであるが、このことについては、機会をあらためて述べることにしよう。

インドのトイレ

——トイレット・ペーパー論争——

野菜ばかりのインド料理を食べていると、最

初のうちは、トイレに行く回数が多くなる。それも、大きいほうである。日本で肉食をしてきたときと違って、とにかく、出る量が違うのだ。少なくとも、二倍は出る。そのため、体がそれに慣れるまでは、一回で用を足しきれずに、二、三回、トイレに通うことになるのだ。

寮のトイレは、さすがにプーナは都会であるだけあって、水洗である。一度、朝早く、田舎に着いたことがあったが、その時は、駅の外を散歩していると、道から近からず遠からずというところの草むらに、何人かの人がしゃがんでいた。近すぎると人から見え、遠すぎると蛇などがでてきたときに、とっさに逃げきれないからだろう。最初は、とても、目のやりばに困った。

トイレは、男子用の小のほうは、日本のトイレと変わらない。大のほうは、日本の和式トイレに金かくしのないものだと思っていただけ

ばいいだろう。大に入つて座ると、斜め前に、水道の蛇口がある。そして、その下には、空缶が置いてある。トイレット・ペーパーなるものは、高級ホテルはいざしらず、普通は置いてない。日本から持参の（もちろんプーナにも売っていたのだが）トイレット・ペーパーを手に、しやがみながら、目はどうしても、水道の蛇口と空缶にいく。「これは何に使うのだろうか」。突然思い当たる。「そうか。空缶に水を入れて手でお尻を洗うんだ」と。だが、始めのうちは、汚い気がして、当然やつてみる気にはなれない。だが、そのうち、日本から持参の紙もころもとなくなってくる。このころちようど、友人のシャランギ（現在インドのオリッサ州のウトカル大学講師）とトイレ談義になった。私は、当然、「紙を使ったほうが、清潔なのに、どうして、使わないのだろうか」と素朴な疑問を述べる。ところが、彼は、主張する。「いや、紙を使うほ

うが、本当は不潔なのだ。衛生的観点から見ても。というのは、紙でふけば、水で洗うのとは異なり、完全には拭き取れないではないか。その点、水はいい。すつかり、きれいに流し落とせる。なにも残らない。手？。手は後で石鹼で洗つておけばいいではないか。すつかりきれいになる。さらに、黴菌は、紙の二、三枚など、すぐ、通つて、手に付くのだ。その点では、手で洗うのと大差はないではないか。紙のほうが清潔だなどと言うのは、完全に心理的な問題にすぎない。衛生的にも、水で洗うほうがすぐれているのだ」と。

「ふーん。こんな考え方もあるのか」と妙に感心した。確かに、手が紙かという文化的あるいは心理的なこだわりを捨てれば、確かにシャランギの言うことに、一理あると思つた。そこで、すぐにその日から、私も手で洗うことにした。

抵抗感を捨てて、手と水でやってみると、これが、なかなかいい。一つは、湿気の多い日本と違って、暑くて乾いたインドの気候・風土のなかでは、まず、日本のように、べたつかないし、さらに、なんといつても、暑いなかでは、ひやっと冷たくて、気持ちがいいのだ。「ふーん。なるほどなあー」と思った。さらに、毎日これが続いていると、ちょうど、今、日本で、ウォッシュレットが、痔にいいとすすめられているように、辛いインド食で患った痔が、嘘のように治っていくのである。ここで、再び「なるほどなあー」というわけである。インドの気候・風土にも、それから、日々の食事にも、このトイレのやりかたは、実にマッチしているというわけだ。

それから、もう一つ分かったことがあった。日本では、「インドでは、宗教的理由で、右手は浄、左手は不浄とされている。だから、間違っ

ても、子供の頭を左手でなでたりしてはいけないよ」と聞かされていた。確かに、こう聞かされてきたように、右手と左手のこのような区別は、宗教的な浄・不浄の観念とも関連している。だが、日常生活のレベルでも日頃から、「食事は右手で、トイレは左手で」という形で使い分けがあり、左手は、実際に、不浄なことに使われているのである。もちろん、宗教的な浄、不浄の観念のほうが先なのか、それとも日常的な左右の手の使い分けのほうが先なのかは、分からない。だが、少なくとも、「宗教的だとされる慣習にも、たえず日常生活上の裏付けがあり、ひよつとすると、日常生活上の慣習のほうが、宗教的な慣習に先行するのではないか」と、思い始めるようになったのである。

(つづく)

アメリカ留学体験記(2)

善光寺海外留学僧 島崎義孝

ヨーロッパのKZS

この夏筆者は初めてヨーロッパ諸国を訪れる機会に恵まれた。マウテンセンターの安居を途中で辞したのは少々残念だったが、八月十日から十月七日までのおよそ二ヶ月間、じつに多くの人々に会うことができた。今回の渡欧には前角老師のつよい勧めがあり、玄法師が筆者の同行を快諾してくださったことよって実現した

のだが、誠に感謝にたえない。前半一ヶ月はイギリス、オランダ、ポーランドでの摂心、後半はZCLAやKZSのメンバーの世話で西ドイツ、フランスの観光をかねた宗教施設見学に時間を費した。その摂心の様子などをごく大まかに記しておきたいと思う。

ヨーロッパ・サンガの摂心は右の順序で行われた。KZCからは玄法師のほかに二人の女性メンバーが加わり、筆者とボストンで合流して

イギリスに向った。KZSはイギリスに二つの場所を確保している。今回われわれが摂心をもつたのはロンドンから北北西、およそ二〇〇キロメートルにあるプレストン (Preston) の近郊、ウォルフエル (Wolffell) という田舎町のはずれである。ヘファーム・ゲートと呼ばれる旧農場がそれだ。あたり一帯は見渡すかぎり、なだらかな起伏に富んだ牧草地で、羊や乳牛があちこちで草を食んでいる。摂心にあてられた建物は十七世紀のものだそうだが、石造りの小さいががっちりしたつくりをしていた。屋根裏部屋を入れると三階建て、日本風というと三畳から六畳間ぐらいの部屋が七室ある。そこに四十人近い人が泊まりがけてくるのだから、たいへんな混みようだ。禅堂にあてられた部屋はいちばな大きい、これだけの人数にはさすがに狭い。たまにしかない摂心で皆はりきっているのはわかるのだが、慣れていないのでなにをしても動

作がぎこちなく多少のもどかしさを感じざるをえない。

坐ぶとんなど横からすかしてみると厚そうだが、実はそうではなく、なかの綿が四方にだけ、中央の部分は薄くなっている。坐蒲もしかり。円形か方形かわからぬものがあってふぞろいだ。人によってはヨーロッパの仏教はアメリカのそれより十年遅れているというが、こんなちよつとした用具類を見ても何ほどかのちがいを感ぜざるをえない。

摂心のスケジュールはKZCのそれとほとんど変りがない。今回のばあいというわけかイギリスでだけ「ワークシヨップ」が二日間あった。たぶん他での摂心との時間調整の意味もあったのだろう。ヘワークシヨップというのは坐禅とか摂心に関する予備知識を与える実践的な学習会で、坐わり方はどうする、経行(きんひん、こちらでは「ヘムービング・ザセン」)とも呼び、

坐禅中の足の疲れを休め、また睡眠を防ぐため、一定時間ごとに歩行する」というような内容が説明される。摂心じたいは六日間だった。昼食のあと午後の坐禅まで二時たらずあつて、皆で牧場のなかを散歩したりという時間枠ももうけられている。筆者はちよと渡英中の師匠、盛永宗興老師をロンドン・ゼン・センターに尋ねるため四日目の朝プレストンを辞した。老師とは八ヶ月ぶりの対面である。

ロンドン市内にもいくつか禅グループがあるそうだが、こちらで知りあつたある人が市内の観光につれていってくれたついでに、ロンドン・ゼン・ソサエティ(ロンドン禅堂)にも案内してくれた。彼の自宅からさほど遠くはなく、自分も朝はたいていここに来て坐るといつていた。ベルモントと呼ばれる通りに面した閑静な住宅街の一角にあり朝夕それぞれ、二時間の坐禅を行っているという。ロンドンではどこにでも

あるごくふつうの住宅だが、筆者が行つたときには八人の人が禅堂にいた。数人はレジデントで、京都の相国寺から来た安藤承純師が住み込みで世話をしておられる。このソサエティは臨濟宗の龍沢寺(静岡県三島市)の鈴木宗忠老師が永くかかわつてこられたが、過去五年は健康がすぐれないため絶えて渡英はないということだつた。

ロンドン滞在中にはいくつかの観光地も回つてみたが、出発の日の午前中、郊外のハイゲート・パーク(Higate Park)に行つてきた。言わずと知れたカール・マルクスの墓がここにはある。古い大きな墓地で他にも多くの著名な人々が眠つている。マルクスの墓は今新たに四メートルばかりの石像に建て替えられ(一九八三年)、写真でみおぼえのある彼の胸像が凛と遠くを見据えていた。ハーバード・スペンサーがそのすぐむかいにある。最初の墓がどこにあるかしら

んと思つて、入口で買った地図を頼りに捜してみた。うっそうとした雑木林のなかに苔むしてゆがんだり、倒れたりしている墓標が不規則に何十列も見えかくれして続いている。じめじめした雑草のなかを目をこらして見てみたけれ



ど、それとははっきりとは識別できなかったのは残念である。

同じ日の午後、ヒースロー空港からアムステルダムに飛んだ。飛行時間は一時間、その時差も同じ一時間である。玄法師と侍者の女性メン

バーは飛行機の都合でベルギーからのアムステルダム入りだったが、筆者と同じフライトに乗るはずのもうひとりの女性メンバーがなかなか現れずやきもきさせられた。後の話によると国際線と国内線のターミナルを間違えたのだという。ヒースローでは表示が入りこんでいてしばしば起こることなのだそう。

オランダはむかしから日本人には馴染みの深い国で、一面にひろがるチューリップ畑のなかに風車が点在している、というイメージを抱いていたのだが、なにかもが想像とは異っていた。八月下旬はもちろんチューリップの季節ではない。風車は現在では観光資源として保存されているだけだという。花が咲き乱れ、一面の青空が広がるというのは五月下旬ごろの一ヶ月足らずで、あとは一年中、曇天か雨の日が続くのだそう。なるほどオランダの撮心中もずっとそんな空模様だった。ネーデルラント(低地)

とも呼ばれるだけあって、出迎えに来てくれた人の話によるとアムステルダム空港あたりは海抜下八メートルだという。視界にはどの方向にも山らしき物はなく、ただどこまでも平野が続いている。目的地のランゲン・ブーム(Langen Boom)までの二時間のドライブ中ついにこの風景は変わらなかった。

KZSはオランダでも二ヶ所を撮心に使っている。ひとつはハーレム(Harlem)市に近いフオーゲレンツァング(Vogelenzang)のデイ・テイルテンベルク(De Titenberg)という集会所である。ランゲンブームにあるテレシア・ホーバ(Therasia Hoeve)はもうひとつの施設で、利用度はこちらの方が高い。ヘテレシアの農場という名が示すように、元来はカトリックの尼僧修道院だったそうである。四十人あまりの撮心参加者にはやはり手狭な建物だが、いちおう団体生活ができるような構造になっているのでそ

の点では比較的使いやすいといえよう。一階にオフィス、調理室、集会室をはじめホールいくつかの個室。二階は元の礼拝所のような空間があり、そこでわれわれは坐った。同じ階には中央の狭い廊下をはさんで両側に五部屋ずつならんでいる。

建物のなかで寝泊りできない人は庭にテントをもち込んでいた。いつときは色、かたちの様々なテントが一〇張ばかりならんだらうか。途中つごうで帰る人、やって来る人もしばしばあり、部屋が空くと先に来た人順にテントを撤去してなかで寝るといふぐあいだった。

困ったのは作務の時間で、雨でも降ると外の仕事ができずみな建物のなかで何か捜すのだが、小さな調理室で十人ほどの人がひしめいているとか、掃除機の使用順序をくじびきで決めるというようなこともあった。もうひとつはトイレ(とりわけ朝)のことである。とにかくどこ

でも女性が半分以上いるので、ひとりの使用時間がきわめてながい(ように思う)。摂心にまで化粧品を持ち込む必要はないというのがこちらで、身だしなみのためといわれればそれまでだが、待っている人がほかにもいることを少しは考えてもらいたいものだ。筆者が僧堂の生活がよかったと思うのはこういふときである。

イギリスの摂心では坐ぶとん・坐蒲の質がよくないと書いたが、テレシア・ホーバではもっと悪かった。坐ぶとんはなく、厚さ三センチぐらいのスポンジにそれらしく布カバーをしているだけで、坐蒲といってもみがらのようなものを厚さ一〇センチ、直経二〇センチあまりの筒状に縫った袋にたくつめ込んだ代物だ。床の硬さがにわかには慣れたと思っている者にも随分こたえた。

サービスはイギリスでもそうだったが、まったく摂心のアクセサリーとでも考えているのか、いっしょにやっつけてもどうも身がはいらない。KZSではZCLAのそれよりサーヴィスは短く、たとえば朝(般若心経(漢訳)、参同契(英訳)、延命十句観音経(漢文読み)、昼(般若心経(英訳)、夕(大悲呪)というぐあいではテンポも早い。とくに延命十句観音経は九説している。そしてそれぞれのお経の後に廻向を読み上げるのだが、途中でよくつまったり、読み誤らったりあるいは声の調子がはずれてしまう。木魚や■子を打ちそこね、打ち方にも随分ムラがあるというあんばいである。もちろんふざけているわけではない、みなまじめなのだがただやり方をしらないだけなのだ。もしわれわれがキリスト教の儀式をやれと言われればこれ以上にひどいことになるだろう。適当な指導をできる人が彼等じしんのなかから出てこなければなら

ない。

テレシア・ホーバではとくに色々な人と知り会ったが、この人たちが後にドイツ、フランス旅行のときに大いに筆者を助けてくれた。

さて、オランダからポーランドへの移動はじつに強行軍だった。なにしろ一一〇〇キロ近くの行程を一日で走りぬけようというのだ。それでも一年間に数えるほどの摂心しかなかったので、終了後もとくに急用でもなければ帰る人はなかった。皆少しでもながく一緒に時間を過していったかったのだろう。前夜も円陣をくんで、遅くまで歓談していたが、四時半起床、五時出発というのはとりわけ運転してくれたメンバーにはたいへんだったと思う。早朝にも拘らず出発する者、見送る者、全員が起床した。乗用車、小型レンタルバスで一五人が分乗した。車のなかでも話していたことだが、実に七ヶ国もの異なった国籍の人々がポーランドに向ったのであ



る。面白かったのはイギリス人とアメリカ人は英語(ないし米語)しか話さないのに、他のヨーロッパのメンバーは少なくとも三ヶ国語が使えるのである。しかもみな英(米)語に堪能しており、車内がドツと笑いの渦にあるなかで筆者ひとりごとが残されるようなことが再三で、こども語学の未熟を味わうはめになった。

オランダは小さな国だ。西ドイツの国境までおよそ三〇分。まだ暗闇のなかボーダーを通過するさいにパスポートを提示するのが当然と想っていたら、行き先を尋ねられただけですんなりと西ドイツに入ってしまった。

西ドイツは知られているようにアウトバーンの発達した国でスピード制限はない。筆者などは文字通り便乗させてもらっていただけなので、その分じゅうぶん外の景色を楽しむことができた。イギリス、オランダでは湿気が気になったが、アウトバーンでは日中だったせいもあ

るが、カリフォルニアを思い出させるような乾いた空気にふれた気分であった。ドルトムント(Dortmund)、カッセル(Kassel)を経て東ドイツの国境にさしかかったのは昼すぎである。西ドイツでは五〇〇キロばかり走ったそうだが、途中で食事や休憩したこともあつて六時間余り西ドイツにいたことになる。

東ドイツはポーランドに行くために通過するだけなのだが、長蛇の車の列をならばなければならなかった。入国検問所は見通しのいい平野部にあり、附近は東ドイツの国旗が林立している。グレイに塗りたてられたいくつかの管制塔や嚴重に張りめぐらされた金網などがいかにも〈国境〉の存在を感じさせる。数珠つなぎになった車を管理官が一台ずつ座席やトランクはもちろん、手荷物類までいちいち調べるので、われわれの順番がくるまで二時間近く待った。車から降りて道路沿の芝生で寝そべったりするほ

ど退屈な長い昼下がりがだ。後のことであるが、アメリカへ帰る飛行機に乗るため西ドイツからアムステルダム行きの列車に乗ったときも、国境あたりで犬を連れた管理官が数人乗り込んできた。このときは肩からかけた銃をそれぞれ保持していたが、パスポートの提示を求められただけで荷物をチェックすることまではしなかった。どこでも麻薬類の持ち込みに神経をとがらせているのだという。

東ドイツからポーランドまでまた数時間のドライブである。西ドイツとは異なり道路幅もやや狭く、舗装のぐあいもありよくない。途中、日本と見紛う光景を何度か目にした。両側に十数階建てのいわゆる〈団地〉が群をなしているのである。ドライブインとか休憩所に属するものは一切なく、オランダから持ち込んだ飲物類でのどを潤すしかなかった。ポーランドと東ドイツの国境はイエルニア・ゴーラ(Jelenia

(Gora)という古い都市のただなかにある。検問所さえなければヨーロッパのどこにでもありそうな中世のたたずまいをもった都市である。落ちついた、というよりは少し陰鬱で殺風景だと感じたのは夕暮れだったせいだろうか。入国手続きを終える頃にはとつぷりと日は暮れていた。そこから目指すプレシエカ(Presieka)までは二時間余りのはずだったが、夜間の不慣れな道路だったため、たびたび道に迷ってやり過したり、ひき返したりした。けっきょく着いたのは一一時を過ぎていた。出迎えの人のなかにはつい数週間前までマウンテンセンターと一緒に過ごした見覚えのある顔がみうけられた。皆寝ずに首をながくしてわれわれの到着を待っていてくれたのだ。

ポーランドは今回のヨーロッパ・ツアーで出発前からもしっかりと筆者は関心をもっていた。われわれ日本人にはほとんど未知の国である。百

年以上前、プロシア遊学の途路ポーランドにたちよった木戸孝允が亡国の民の悲惨を目のあたりにし、日本の立憲君主制化が急務であることを痛感したということを何かの本で読んだことがある。ドイツとオーストリアによる「ポーランド分割」の時代もあるがその歴史を通じてこの国は他国からの侵入をしばしば受けてきた。

十二世紀にもモンゴル民族の侵入を受けているが、ある人たちによると仏教ともそのときすでに何かのかたちで接触があったらしい。ポーランド語で「起きる・覚める」という意味の単語は「ブディジイ(BUDICIE)」というのだそうだ。ブツダー目覚めた人、というのに音が似ている。だが、ポーランドは伝統的なカトリックの国で、われわれがはつきり知りうる仏教の紹介はごく最近のことに属する。いくつかのサンガがあるがもともとはやいグループは一九七五年、フィリップ・カプロー(Philip Kapleau)師によ

って設立された。同師はそのうちにポーランドから手をひき、現在はトロント・ゼン・センターのゼンソン・ギフォード(Zenson Gifford)によって指導されている。七八年には韓国のソーエン・サン(Seung Sahn)師のグループができた。同師はさいきん活動の重点をアメリカからしだいにヨーロッパに移しつつあると仄聞しているが、筆者はアメリカで何度かお目にかかったことがある。日本語にも堪能な国際人である。さらに上座仏教のグループもそれにつづいて設立されたが、KZS(ポーランドではなぜかカンゼオンとだけ呼称している)はこれより数年遅れて一九八三年。ごくさいきんではカリフォルニア州ソノマ・ゼン・センターの寂照師もサンガをもちはじめている。だが、サンガとはいってもいくつもあるわけではなく、ここでは異なった指導者が来るたびに異なった名称が用いられるだけで、同じ人がいくつものサンガに加っ

ているというのが実態である。つまり、かれらは指導者とのもつと頻繁な接触を求めている、といえるだろう。

KZSの最初の摂心は首都ワルソー(Warsaw)にある韓国系のカンノン・ゼン・センターを借用したそうだ。そして僅かの期間にメンバー数一二〇名余りを数えるようになり、昨年八年には三〇人が受戒した。しかし摂心をもてるのは年に数回のこと、常時は、ワルソーをはじめラックロー(Wroclaw)、ゲダンスク(Gdansk)そしてプレシエカで地域ごとと一緒に坐る機会を持つているという。筆者が行ったプレシエカはワルソーから南西五〇〇キロ、チエコスロバキアとの国境がすぐ南にせまっている。

今回の摂心は五日間ずつ、一日半の休息日をはさんで二度行われた。大部分の人は両方の摂心に加わったが参加者はのべ八〇人ほどいた

だろうか、建物は二つあって、ひとつはKZSメンバーの所有になる。三階建ての古い大きな家で半分の人達はここで寝泊りし、また坐った。もうひとつはフィリップ・カプロー師のグループが持つ建物である。このふたつの「禅堂」は山地から流れ出る清流をはさんで対峙し徒歩三分ほどの距離にある。後者は少し小高いところに位置し「ヘアップ・ゼンドロー」と呼んでいたが、われわれの半分は毎日ここから「ダウン・ゼンドロー」に玄法師のダルマ・トークを聴きに行った。あたり一帯はブナ林を中心とした凹凸の多い閑静な山地で、降雨が多いせい、か緑が鮮かだ。住宅がゆるい山の斜面や川沿に点在しており、ほとんどどの家の庭にも石炭がうず高く積まれている。暖房のためでもあるが、台所の調理用燃料でもあるのだ。ガスや電気がふんだんに、しかも簡単に利用できるという社会ではない。のどかすぎるほどの光景が林を散歩しても、村

を通りぬけても展開した。それにもかかわらずヨーロッパでの三ヶ所の摂心のなかでは筆者はポーランドで、もつとも強い熱気のようなものを感じとることができた。彼等の年齢が二十代から三十代半ばということもあるのだろうか、カンゼオンのある人が話してくれたように、社会システムの閉塞からくる精神的な鬱積がばあいによつては若い人々を「ヘゼン」などにむかわせるのだろうか。

二つの摂心のあい間にオランダとアメリカから来た人たちと四人でポーランドの古都クラッコウ(Krakow)に行った。プレシエカから三時間、一見の価値ありというふれ込みにのつたのだが、じっさいには六時間もかかってしまった。誰かの友だちの友だちが宿の世話をしてくれるかもしれないという頼りないありさまで、クラッコウに着いたのは九時過ぎ。それから教えられたように韓国系の「ヘカンノン・ゼン・センタ



久保菜穂

三好



ー」というのを苦勞してようやく見つけ出したのだが誰もおらず、右往左往したあげく、やつとそのセンターのひとりりをさぐりあてた。彼はポーランド人だが英語はほんの片言で、逆にこちらの方はポーランド語など話せる者は誰もおらず苦勞した。だが、お互いに名前も顔も知ら

ずの初対面にもかかわらず、撰心のためにここまでやって来たとして知って快くうけ入れてくれた。筆者もこのときばかりは友だちの友だちということばを信じかけたが、これはヘダルマの世界のことだと合点した。翌日は、美術史家の彼が市内を方々案内してくれたが、ポーランドにこれほど大きな古い都市があるとは夢想だにできなかった。朝食をとるためにわれわれが入った高級レストランはすでに十一世紀からそこにあるのだそうだが(ポーランドでは貨幣価値が西側のそれよりも随分低く、貧乏人のわれわれでも高級レストランに入れる)。そして十三世紀

には近隣の諸侯が集まって平和会議をここで行ったと石標を示してくれた。あるカトリック教会はイギリスで見たそれよりも古色蒼然としていた。キリスト像の足の甲の部分磨滅しているのは永年月のあいだ信徒が絶えず礼拝のために手を触れてきたからだろう。

これと同じ日、プレシエカに帰る途中、少し遠回りだがアウシュビッツ(Auschwitz)にも寄ってきた。知られるようにナチス・ドイツのユダヤ人収容所のあったところである。アメリカから来た女性メンバー(現在は西ドイツ在住)の親戚がやはり第二次世界大戦中、おそらくここで殺されたらしい、是非見ていきたいと言っていたからである。戦争の悲惨を今日に伝えるため、現在残されている遺構はそのごく一部分にすぎないということだが、ひと言でいえば二〇〇万人もの人々が、これほどシステイマティックに殺戮されたのはまさに驚嘆に値する。列車

でユダヤ人ゲットーから大量輸送され、收容所にへ順番が来るまでごく僅かの食料を与えられるだけで、身辺の持物はすべて没収される。

やがて近くの「工場」に送り込まれると、ここでは有刺鉄線が幾重にも張りめぐらした砂利の回廊をぞろぞろ歩く。ある者はガス室に、またある者はいったんある建物に入れられた後、すぐ横にある処刑場で銃の洗礼をうけるためだ。

死体はオーブン室に運ばれ、消却がすむと灰はそのまますぐ下にとりつけられたレールつきトロッキに落されて、一定量になるとトラックが灰を積んでどこかに捨てる。現在はオーブンは二器が残されているだけだが、われわれが行ったときには花束がうす高く積まれていた。親戚とか何か強いかわりのある人たちが置いていったのだろうか、この人たちにとっては二器のオーブンが死者の墓標なのだ。以前ヴィクタ・E・フランクルの『夜と霧』という本を読

んだことがあるが、何からこんな狂気が生まれるのだろうか、やはり同じ問いをもたざるをえない。生身の人間を使ったとうていええられない人体実験、妊婦の解剖、頭髮や歯でつくった各種の日用品の製造、等々。

さて九月八日、ポーランドでの撮心を終えたわれわれはやはり同じように早立ちして、ほとんど同じコースを戻った。西ドイツから一緒に来た青年は大学が始まるのでひと足はやく帰り、アメリカの女性はそのままプレシエカに残ったので、復路の車は少しさびしくなってしまった。来たときと同じ西ドイツ内のレストハウステ遅い昼食をすませたのは午後三時を回っていただろうか。数葉のグループ写真をとったのち、筆者は玄法師一行と分かれることになった。KZSのひとりのメンバーの家に二・三日泊めてもらうためである。玄法師らはそのままアムステルダムに行き、アメリカ帰国までしばらく

そこで休息することになっていた(結局、ここでもワークシヨップを持つはめになったらしい)。

撰心後、西ドイツではデュッセルドルフ(Düsseldorf)、ケルン(Köln)、アーヘン(Aachen)、マインツ(Mainz)、ミュンヘン(München)にそれぞれ数泊し、その間パリにも一週間滞在した。この西ドイツ、フランス旅行も意義深いものであったが、今は割愛する。

問題点と展望

じじつ上発足してまだ日も浅いベビー・カンゼオンに一度に多くを期待することは無理としても、注意しておかねばならない点は多々ある。今日のアメリカ、ヨーロッパにおいて仏教グループが量的に拡大するのは決して難しいことではない。むしろかえってそうした量的拡大が、内容を損ねてしまうこともありうるのだ。以下、

筆者の気づいた問題点をいくつか列挙してみよう。

端的に言ってこれまで筆者が回ってきた仏教グループのなかで「フオーム」に関していえばKZSのそれがもっとも整っていない。ここで「フオーム」というのは、たとえば禅堂での所作とか、応量器・鳴物のとり扱い、あるいは誦経の方法などのことであるが、「動く禅堂」とも呼びうるKZSでは団体での継続的な修行形態がとりにくいために、どうしても右のような難点がつきまとう。とりわけヨーロッパでの撰心では、必ず毎回初めての参加という人があり、また稀にしかこういう機会をもつことができないので、他の人々もいくら所作に慣れたところに撰心が終わってしまうという具合で動作が身につかない。日本でもそうだがいわゆる居士・大姉が中心の撰心では、僧堂でやるような細かな規矩の締めかたは事実上不可能であり、この

ことは欧米の摂心でも同じことだ。また一般的に言えばKZSのようにアメリカ人ならアメリカ人がそのグループを指導しているばあい、曹洞宗を名のついても自己流に日本のそれとは相当異なった方法を採用しているか、もしくは指導者じしんが伝統的なヘフオームにじゅうぶん習熟していないことがままたまある。しかもまた日本でいう宗派の別は事実上機能していないといつてもさしつかえないだろう。自己流の改変というのは、それが事情に応じて適切になされていけば問題はない。むしろ日本と異なる環境では改変されるべきものが多くあるかもしれないからだ。だが指導者じしんがじゅうぶん習熟していないばあいはメンバーに及す影響はきわめて大きい。多くのばあい欧米のグループでは具体的なヘフオームについて他に比較する対象がないので、われわれの目からみれば「盲従」とみえるほどその指導者の挙動をまねてい

ることがある。そしてこの傾向は指導者と長く接し、かかわりの緊密なセニヤー・ステューデントほど強い。したがってそれが全体に及す影響ははかりしれないと言えよう。KZSでも同じようなことが指摘できる。

仏教儀式儀礼に属すヘフオームについては欧米人の感覚からすると反発や異和感を抱かせるものもあると思われる。サーヴィス（誦経）とか五体投地の拝などはそうした例のひとつだと言つていいが、意味の説明と時間をかけた適切な実地指導が不可欠であろう。幸いKZSはZCLAと強いコンタクトをもっており、KZSのメンバーが望めばZCLAの夏安居で、伝統に準じたこの種のヘフオームを学ぶ機会を与えられている。

筆者がKZSの生活を通じてしばしば感じることは共同生活を営むうえでもっと基本的な事柄が訓練されていないことである。ヘフオーム

ともいえないが、たとえば禅堂で歩く時に足音をたてないとか、食事の時もなるべく物音をたてないとか、あるいは使った諸道具・食器類をもとの位置に戻しておくといったことなどである。そういう細かな日常の生活を矯正してこういう人がKZSには残念なぐらいないようだ。何も坐禅や代参ばかりが修行ではないのだが。

こうしたいわば「へ理論と実践との乖離」という問題については前回のレポート（ZCLAに関する）のなかでも少し述べたこともあるけれども、それをやや異なった視点から見ると次のようにもいえるのではあるまいか。

問題点

われわれが目ざしているのは、知識として得たことがらを行為として現実の生活のなかで、生きたものとして実践していくことにある。へ修

行」というのはその実現化あるいは日常化の絶え間ざるプロセスであり、終点がない。だが、その「へ修行」をどう指導していくかという段になると大きく意見が分かれるだろう。つまりそれは「へ人間観」の相異に根ざしている。一方には人間は万物の霊長であって、修行においても当人の自主性と人格を尊重し、飽くまでも当人の自覚と人間性に基づいた方法が採用されるべきである。心身に対する強制は加えられるべきではない、という考え方があり、また他方では次のような言い方もできる。人間も基本的には動物であり、当人の潜在的な可能性をひき出すためには人間は単独ではそれほど強いものではないから、時には外からの強制も必要である。これらは二つの典型をしめしており、実際には両者が交錯して使われるのであるが、筆者などは道場でどちらかというと後者の方法で育てきたので、文化的背景の異なる人々と日常生活





を共にしてみるとその対比人間の内在的な可能性に期待することは以上に困難で、時間と非常な忍耐のいることがわかる。もちろんそれは彼等が筆者に対して持つ感慨でもあるのだろうが。

KZSについてとくに指摘できるのはみてきたようになんといっても指導者層の薄さと急速なメンバーの増加のアンバランスだろう。ZCLAにおいてもいつとき居住プラクティシヨナーの数が一二〇人余りになったことをわれわれは知っているが、そのさいには老師を中心として彼等をサポートできる数人の高弟たちがいた。しかもKZSのようにアメリカ内外での広い地域にわたって散発的に摂心をもつというのではなく、居住しながら指導者との緊密なつながりをもつことが可能であった。そういう意味で比較していえばKZSは二重にも三重にも負担をかかえているといえよう。まず必要なこと

は数人の有力なプラクティシヨナーを養成することだろう。

もつともすでにこの試みは開始されていてこのグループではニコ・タイデマン (Nico・宗純・Tydeman) 氏とカトリーン・ペイジ (Catherine・玄能・Pages) 女史がヘインタビュー (個人面談) と称して、参禅に類似したことを行っている。タイデマン氏はオランダのアムステルダムに在住で、もともとはキリスト教神学者志望だったがそれには飽き足らず、一九七二年にサンフランシスコ・ゼン・センターで初めて坐禅の経験をもったという。それ以後、急速に仏教に傾倒し、日本の禅寺でしばらく止宿していた時期もある。現在四十六才だが、オランダの人々のために日本仏教の概説書や禅仏教に関する書物を執筆中で、また一方では週二回、居住から遠からぬところにあるヘコスモス (一種の精神修養センター) で坐禅の指導や仏教の学習

会をもっている。またペイジ女史は年齢的にはタイデマン氏より少し若く、ここ数年はほとんど玄法師とずっと行動をともしており、フランス人だが、現在たいいはバー・ハーバーのKZCで起居している。来年一月のはじめの九〇日安居ではヘッド・トレイニー（首座）をつとめる。もともとはパリ市内のロダン美術館で学芸員の仕事をしていたが、一九八一年に両親とネパールに旅行したさい、そこで見た仏教僧の生活に何か啓示のようなものを感じた。それが仏教との最初の出会いで、パリ市内の禅グループもいくつか探訪したという。一九八二年にZCLAの摂心に参加していらい坐禅を続け、このころヨーロッパに居た玄法師に就くようになった。授戒したのは二人とも一九八七年、昨年のことである。

ヘインタビューンでは個々人のかかえている様々な精神的な問題とか、プラクティスに関する

る相談などが行われるほか、「公案」の見解の呈示とその当否が扱われているのだそうだ。前者の問題に関して、セニヤステューデントが行上の後輩に対してなんらかの指導することは可能だろう。しかし「公案」の扱いまで彼等に依託できるのだろうか。少なくとも日本で、とくに臨済宗の専門道場で行われている方法とはまったく異なる。師家のみが仏道修行の權威に基づいて学人を接得できるとされている。ここで筆者が思い至るのは中国の「純禪の時代」といわれた禅仏教勃興期のころの叢林の様子であるが、一山に一四〇〇〜五〇〇人の学人が修行していたころ、具体的な指導にはどのような方法が採用されていたのだろうか。もとより今日の欧米の仏教グループとは形態が様々の面で違うが、ひとりの師家のまわりには、優秀な高弟群があつて彼を援助しつつ修道していたはずである。数多くの語録などによってわれわれは

多くのすぐれた修行者の行持とその生活を垣間
見ることはできるが、指導法の細部までによく
知らされていないのではあるまいか。その実際
がはつきりしていれば、そこから学ぶべきもの
は多いはずだ。もとよりKZSで採用している
方法は指導者とプラクティシヨナーとの極端な
数のアンバランスから来るいわば苦肉の策なの
だが、そこには重大な落とし穴が潜んでいるよう
に思われる。拙速という事態は十分ありうるだ
ろう。大燈国師「第五橋辺二十年」とか無相大
師「伊深の聖胎長養」の話などアメリカで語ら
れるのをただの一度も耳にしたことはないが、
こんなことを言い出せば彼等に一笑に付されて
しまうだろうか。いずれにせよなるべく早い時
期に適当な新しい指導者が彼等じしんのなかか
ら生まれる必要がある。

一方、アメリカ・ヨーロッパの仏教グループ
の強みは「横の連絡」の緊密さにある。それは

たとえば冒頭で書いたように、晋山式の刻限に
式に列席できない地域のメンバーが集まって一
日坐禅の機会をもつといった行動に端的に示さ
れる。誰かとくに言い出すわけでもないのだが、
この種の活動の手ぎわよさ、協調性は見ていて
誠に快い。おそらく指導者不足をなんらかの面
で補填できることがあるとすれば、このような
メンバー間の協同性に基づいた相互学習だろう
と思われる。メンバー相互間の研鑽のなかから
いい指導者が生まれるのではあるまいか。

ところでこれほど広範囲にわたってメンバ
をかかえているカンゼオン・サンガは今後どう
いうふうに展開していくのだろうか。他の禅グ
ループとはまた異なった固有の問題をかかえて
いると思われる。くりかえしていえばひとりの
指導者に驚くほど多くの人達がよりかかってお
り、また日常生活のなかでのプラクティス（修
行）が強調されているだけに、指導者とプラク

テイシヨナーがなるべく多くかわれる機会が
どうしても不可欠だろう。すでにみたようにリ
ーダーである玄法師のこの一年間の日程は本拠
地であるバー・ハーバーで七ヶ月、あとはアメ
リカ国内とヨーロッパでの撰心のために半年と
いうぐあいになっている。多くの無理があると
思われるし、なんらかの改変をせまらざるをえ
ないだろう。この点を玄法師に尋ねてみるとこ
ろ、答えはおよそ次のようであった。今後は一
年のうち九ヶ月はバー・ハーバー、あとはヨー
ロッパおよびアメリカ国内の撰心指導に費し、
しだいに重点をKZCに移していきたい。ヨー
ロッパへはそのうち年二回ぐらい行くにとどめ
るつもりだ。しかしセンターじたいを拡大する
ことつまり新しい建物の購入は現在のところ考
えておらず、三十人前後の集中的な撰心を行え
るようにもつていく考えである。そしてできれ
ば伝統的な私たちの禅堂がほしい。

こうした発言はサンガじたいが拠点をもつに
至ったことから出てくるわけであるが、どうじ
にある種のふるい分けという意味もあるのでは
あるまいか。またそれはいたしかたのないこと
かもしれない。ZCLAのスタッフとして長く
働いてきた同師が、そこでの経験からあまり多
くの人数をかかえるのはプラクティスの内容を
充実させるためにも、また経済的な面での負担
を考慮したばあいも得策ではないと判断したか
らであろう。KZCでは今秋二ヶ月間（一九八
八年九月二九日～一月二三日）のトレーニン
グの期間をもった、数ヶ所にわたる単発的な撰
心の連続ではなくて、一定箇所でのこれだけのま
とまった時間を坐禅に費せたことはメンバーに
とっても喜びとするところだろう。そして、一
九八九年にはKSとして初めての九〇日安居
（一月一九日～四月二〇日）が行われることにな
っている。それによると最初と最後の休日分

なし一ヶ月摂心で、しかもはじめの月は全日程参加者のみ、二ヶ月日は最低二週間、さらにさいごの月は最低一週間参加できる者という条件が示されている。おそらく右のようなやり方は実験的なものであって、随時生じてくる問題(たとえば仕事の都合で朝夕とか週末にしか摂心に通えないバーハーバー在住の人は参加できるのか否か、などさしあたりまっ先に生じる問題だろう)については柔軟に対処していかざるをえない。それに対してたとえばどうしてもKZCに来て修行したいという人のためには家族ぐるみで受け入れるようにしたいともいう。修行と称して別居したため家庭が崩壊したというようなことを避けたいためだ。

だがKZSがプラクティスの道場として成り立っていくために早晚かかえるもつとも大きな問題はヨーロッパからのメンバーの処遇であろう。つまり交通費とか長期の滞在には大まいの

費用を要するが、そうなってくるとまとまった時間や財産のない人々はたいへんな苦痛を強られることになる。先にふるいわけといったのはじつはこのことである。アメリカ人が広い国内を比較的自由に動き回るのとは異なり、外国人にはアメリカでの収入の道はごく限られているのである。

いずれにしてもKZSは今後、次々に新たな問題をかかえることになるだろう。サンガの結束が期待される。

おわりに

今回のレポートは報告というよりはむしろ感想文になってしまった。調子がたえず変化し、一貫した内容になっていない。とくにヨーロッパに関する記事について、このことがいえる。

それは筆者の文章表現力や構成力の非力によるものであるが、どうじにヨーロッパでの一ヶ

月間の摂心とKZCでの生活の様子を自分なりになんとかかひとまとめにして記録にとどめておきたかったからである。

また小文中、冒頭からことわりなしに「カンゼオン・サンガ(KS)」と「カンゼオン・ゼン・センター(KZC)」とを区別したが、筆者はKSをKZCより大きな概念とみなしている。つまりKZCはKSの本部だが、彼等のいう「ヘサンガ」というものの全体から見ると一部分にすぎず、それぞれの小サンガはKZCを指向しつつも独自の活動を行っていることを強調したかったためである。

最後になってしまったが、筆者のインタビュ어의申し込みに快よく応じて下さった玄法師やKZCの人達に感謝の意を表したい。何人かはすでに臘八摂心のためヨーロッパに帰ってしまった。玄法師も昨日の早朝ヨーロッパにむけて発たれた。(一九八八年一月二〇日)



第六回海外留学僧募集について

目的 大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先 世界各地

派遣期間 一年間とするも場合により延長するも可

給費 派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員 2〜3名

提出書類 (1) 保証人と連署した願書 (4) 卒業証明書

(2) 卒業証明書(写し) (5) 推薦書

(3) 履歴書 (6) 論文

提出レポート

● 禅の国際化と私の役割 ● 二二世紀の仏教と私の役割

● タイの仏教に学びたいこと ● 未来社会の仏教と私の役割

いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五〜一〇枚

原稿メ切 平成元年十二月二十五日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局



・善光寺だよりの・

五月二十四日、大雄山最乗寺余語翠巖老師を
大導師に迎え、開創二十周年記念法要がおこな
われた。

開創二十周年記念法要香語

大圓覺裡無生死 大圓覺裡、生死無し

善惡波頭光不光 善惡、波頭、光と不光と

二句長短誰得意 二句、長短、誰か意を得

ん

薰風滿地露堂々、薰風、地に満ち、露堂々

恭しく惟れば是の日、当山開創二十周年記念の
好辰に相値う。乃ち、道場を嚴飾し、菲薄の奠
を設け、以て、大恩教主釈迦牟尼佛、高祖承陽
大師、太祖常濟大師、当寺開山大和尚、三世十
方一切三宝に供養し奉る。

伏して冀くは、正法興隆、万邦和樂、国土安
穩、諸縁吉祥、山内鎮淨、諸災消除。

更に祈る、当山檀信、有縁、万縁吉祥ならん
ことを。

伏して惟れば、至禱至禱

ついで記念式典における開基家の祝辞は次の
とおりである。

祝 辞

当善光寺が開創して二十年をけみ閱しましたこ
と、まことしゅうちやく洵に祝まことしゅうちやく着至極に存じます。

人間でいえば、成人というところでありま
す、周囲の寺々が、三百年五百年の伝統の上
に立っていることを思えば、二十年はホンの一瞬
の時の経過でしかありません。

にも拘らず、今日すでに二千有余の檀徒を擁
し、又留学僧を海外に派遣するという、一宗を
挙げて、実行困難な大事業を単独で実施して

いることは正に驚異というべきであります。

黒田方丈様の崇高な大誓願と卓抜した実践力には、只、只、敬服のほかありません。

またそうした方丈様が、思う存分、腕を振るうことが出来るよう、協力して下さるお檀家の皆様の御信心と、善光寺護持の熱意に深く感銘すると共に、厚く御礼申上げるものであります。そして又先代が開基家として、方丈様と深い御縁を結んでいただきましたことを、心からよろこんでおります。先代夫妻、また泉下に於て、本日のこの盛典に、破顔微笑しておられることと存じます。

本日は本当におめでとうございます。

平成元年五月二十四日

ナリス株式会社

開基家

村岡

有尚

施食会とお盆行事無事円成

七月三日、新盆施主の施食会。法話 佐藤俊

明老師

七月四日、山門施食会。法話 中野東禅先生。

七月十三日から十六日までの間、お盆の棚経が無事おこなわれた。

中野師が特派講師に任命される

スリランカに留学していた第二回留学僧中野良教師（保谷市東禅寺副住職）が曹洞宗特派講師として八月より米国ロサンゼルスへ派遣されることになった。

本坊光真寺夏大祭へ参拝

善光寺婦人会の主催により、恒例の夏季旅行として、七月二十四日・二十五日の両日、大田原光真寺本坊を参拝した。当日、長生閣明月苑

に一泊し、翌日、益子焼き窯元を見学し帰途に
ついた。

ワットパクナムより大蔵経寄贈

善光寺開創二十周年を記念して、タイ国皇帝
陛下還暦記念出版のパーリー語大蔵経が、ワッ
トパクナム・プラタムパンヤーボデー住職より
善光寺に寄贈された。



ご寄付御礼

〈海外留学僧派遣育英会〉

水澤工務店殿	五十万円	内海 忠男殿	一万円
松本 啓殿	二十万円	新木 定夫殿	一万円
黒田 能勝殿	十五万円	綿貫 信一殿	一万円
金剛 秀房殿	十万円	太田 勇殿	一万円
成田 大航殿	十万円	中央 典礼殿	五万円
黙 仙 寺殿	十万円	金剛 秀房殿	二万円
橋本 広子殿	七万円	村石 恵照殿	一万円
南 敬爾殿	五万円	福井 周道殿	一万円
福田 富治殿	五万円	渋谷 玲祥殿	一万円
小川 光生殿	五万円	内山 款偉殿	一万円
横山 信吉殿	五万円	鳥屋原百合子殿	一万円
渋谷 玲祥殿	二万円	南 敬爾殿	一万円
岩井 正明殿	一万円	斉藤 喜一殿	一万円
高山 徳殿	一万円	成田 大航殿	一万円
高源 院殿	一万円		

〈成寿賛助〉

「海外留学僧派遣育英会」
 ならびに「成寿」に、上記
 の方々よりご寄付をいただ
 きました。心からお礼申し
 上げます。

● 読者からのお便り

方丈様並びに奥様には益々御健勝にて此の度開創二十周年をお迎えになりました事を心からお喜び申し上げます。

記念式典参列のお招きを頂きましたので、お二方様のお喜び、御満足は如何ばかりかとお察し致し式典に参加させて頂きましたが、大層盛大な式典に感激いたしました、式後の御供応も十分に頂き、沢山のお土産まで頂きました。ありがとうございます。お目にかかりお祝いをと思いましたが多勢の御来賓の御接待に御多忙の御様子でしたので御遠慮申し上げます。

方丈様の今迄の御努力は釈迦殿その他堂塔の完備、大日如来尊像をはじめとする仏像奉安と相継いでの大、さらに海外留学僧育英会制度の実施と目覚ましい成果を成し遂げられました。その上に四人の御子息様

がタイ式の得度をうけられ、その感動的な儀式に方丈様の強い信仰心が私どもの胸を打ちました。今後健康に留意され、更に今後とどまることのない精進をお続けになりますことを祈念いたします。

横浜市 宮下 賢一

伊藤先生の個展にお招き下さいましたまことに有難うございました。数々のご立派な絵を拝見致しこんなにも偉大な先生をお近くにお伺い出来ますのも方丈様のこの上ないお徳の深さによるものとおもい感謝申し上げます。

東京都江戸川区 横塚 和子

先日、方丈様のことを「宗教新聞」で拝見し、「願」に生きたる近代の出家者のあり方を印象深く読みました。教育の一面を担っておる私自身にとって反省すると共に何かできることをやらねばと感じました。

横浜市 石井 修道

このたびは「成寿」第十二号と海外留学僧派遺育英会の各種資料を御贈り下さり、ありがとうございます。僧侶としての修業に加えて、研究のために行かれる方々にも御助成なさる傾向に賛意を表します。御山内の益々の隆昌と皆様のご健勝を祈念いたし、御礼いたします。

東京都世田谷区 吉津 宣英

アメリカの禅修業の様子など興味深く拝見しました。佐藤老師と貴師の暖かいアメリカ旅行だと拝見いたしました。

円覚寺さんと印度仏跡巡拝を無事勤めて来ました。三度目のネパールではヒマラヤ山脈の雄大な姿を見る遊覧飛行の体験をしてきました。

福知山市 久昌寺

黒田理事長はじめご令室様には癒々

ご清適に御過しの御事と存じます。さて、本日は、『成寿』春季号のご惠贈を賜り厚く御礼を申しあげます。

安井隆同師の『博士号授与される』の報は、仏縁を結ばせて頂いた私にとつても喜びは一夕のものです。早速お祝いのお手紙を認めました。尚、ワット・パクナムに寄宿中のスリランカ僧・ラ・タナシリ比丘が五月中旬来日、しばらく大乘仏教の勉強をしたいとのことす。上京の折には親しくご拝謁賜りたく存じます。

茨木市 梅田 尚平

『成寿』並びに海外派遣僧募集要項等御送り下さいましてまことに恐れ入りました、海外での坐禅修業がこんなにも層厚く行われていることを知り感歎いたしております。

インドもアメリカも日本も仏教を通してだんだん近くなってくるのを感じます。

まずは心からあつくお礼申し上げます

す。

東京都大田区 水野弥穂子

拝啓 成寿（春季号）を御送り頂き御礼申し上げます。この号では、大変教えを多く受けました。小倉住職の『正法眼蔵』、保坂氏の『闇の中の宗教体験』、島教授の体験記などです。いずれも行間に筆者の手柄が出ていて、私はその手柄が好きだということかもしれません。文章では、いいものもありますが、表題の端々に傲慢なトゲがあり幻滅したのもありました。文は手をはなれたら読む人の解釈にゆだねなければなりません。それは、人となりの反映であることを感じさせられました。

船橋市 遠藤 宣雄

拝謝『成寿』第十二巻春季号のグラビアにロス・ゼンマウンテンの法戦式について編集されていますが、実は、小生五年前一年間ロスに居まし

た折、前角老師のご案内で、随喜しました。写真の顔ぶれにその当時、会った人もおられ、なつかしく思いました。当時より立派になっていくことが伺え、うれしく思いました。

東京都世田谷区 田上 太秀

貴寺の現代的・実践的諸活動に感銘をうけ、また、敬服いたします。仏教の国際的伝道は、釈尊の最も希望されるところと存じます。そのためには、一方で深く伝統を顧ることも必要かと存じます。面受において伝えられてきた禅の骨髄を、充分汲みつつ、世界へ向けて活動されている貴寺の、今後の御活躍・御発展を心より祈ります。

つくば市 竹村 牧男

過日は当社祖先祭にご来社をいただき貴重な体験談をお話しいただきまして誠にありがとうございました。従業員一同大変感激してお話しをう

かがいました。

どうぞ、今後ともご指導下さいませ
様お願い申し上げます。

栃木県ミツトヨ宇都宮事業所

「大日如来さまをお迎えした」ウラ
話

旧冬十一月二十八日に善光寺は大日
如来さまをお迎えしました。黒田大
田老師は海外留学僧を募集し、派遣
し自らも海外に学び講演される等国
際的な視野に於て大活躍をなされ全
ての事を忘れて奔走しておられるよ
うですが、どうしてどうして仲々神
経細かて人として最も大切な孝順心
を忘れることがない老師さまです。
十一月二十六日大日如来さまが奉納
される二日前、大田老師のおじさま
まおじさまが静かに眠る長野県須坂
市興国寺（お母さんの生家）の墓前
にこのことを報告、菩提を弔う供養
をされております。この素晴らしい孝
順心が信者の心を打ちご協力を惜し

まない気持ちにさせられるのではない
でしょうか。

長野市 池沢 悦二

先日は先代社長十三回忌をむかえ、
先生には御多用の中遠路はるばる光
来いただき誠に有難うございました。
先生の御厚情あふれるご法要、御焼
香を賜り、先代社長の御霊も泉下で
さぞかし、満足されていることでは
よう。

このたび小生の中国上海出張に際し
まして、過分なご餞別をいただき、
恐縮に存じます。先生の御芳情、身
にしみて、嬉しく心から深謝致して
おります。誠に有難うございました。
厚く御礼申しあげます。

中国出張には黒田先生のご指導頂い
たことを肝に銘じ、社長の心を心と
し、職責を果たすべく力の限りを尽
くしてくる所存でございます。

三木市 面川 勝治

拝啓、先日雪峰尼と一緒に伺ったと
きには、お忙しいにもかかわらずお
会い下さいましてほんとうにありが
とうございました。

雪峰尼は次の日に韓国へ帰りました
が、今度の日本の訪問には、方丈様
にお目にかかったこと、本堂の厳肅
さ、日本のお茶の点前などを拝見さ
せて頂いたことは大変有益なことだ
であったと感謝しております。

私も急に伺って失礼ではないかと心
配しましたが、方丈様にお目にかか
った瞬間、その心配がすべてなくな
り、勇気を出して伺ってよかったです
と思いました。日本にいるあいた学校
だけではなく、人の為に尽くしてい
らっしゃるところを自分の目で見学
させて頂きたいと思っております。

東京都北区 陳 永裕

現代農業生き残り策の転換作目には

ウスサ克蘭ボ(千二百坪)を選んで取り組みましたが、以外と困難の連続で文字通り暗中模索の六年でありました。漸く今年になって濃霧が去って前途が見通せるようになってまいりました。

仏様の御慈悲によるものと感謝申し上げて居ります。「観音の妙智力はよく世間の苦を救いたもう」改めて普門品の一節が有難く身に感ぜられます。すべては仏様の方便の中でのことで知恩報恩の心を育てて頂く仏身成就の修行の過程と心得、一層の精進を励まねばと心を新たにいたします。

長野県須坂市 桜井 幸男

八月一日付のお便りを拝受しました。八月八日から一六日まで中部ヴェトナムのフエ・ダナン・ホイアン、そしてホーチミン市に出張していただきましたので、お便りを拝読したのが一六日の午後でした。

『佼成』八月号の庭野日敬会長との対談を読ませて頂きました。方丈と会長とが相互に尊敬し合っていることがよくわかり、かつ御二人の目指す方向が一致した会話で、読み進めるうちに方丈のお人柄も随所によくにじみ出ていて、気持ちのよい読物になっていました。大変素晴らしいことだと思えました。編集者の編集技倆もあるでしょうが、やはり対談者の御二人の力量があるので、これほど充実した内容になったのだと思います。アジアを勉強する者の一人として、方丈が「もつともつとアジアを大事にしなければならぬ」と思っています」と発言して下さり、我々が意を得たりの心境です。方丈の御活躍の軌跡を少しでも知るものにとって、この御発言はドッシリと重いものとして響きます。しかし、ともかくにも、庭野会長から注目され、黒田先生のなさっているお仕事は立派ですよ、ほんとうに尊い事業で

す。御健闘をお祈りします」という言葉をかけられた事実をもって、方丈のお仕事が壇家や曹洞宗という枠組みを越えて、宗教家として広く認知されたことの一つの大きな象徴のように思えます。おめでとうござい

ます。もう一つ、おめでとうございまして申し上げます。中外日報で知りましたが、今年が善光寺開創二十周年にあたる年で、その記念法要並びに式典が五月二四日に挙行されたことに對してです。ヴェトナムにおいて参加できませんでしたが、善光寺の今後の発展を特に海外留学僧派遣育英事業の発展を、遙か遠くハノイからも、心より折念申し上げております。奥様に呉々もよろしくお伝え下さい。

北大教授 育英会顧問、在ハノイ 坪井善明

●留学僧からの便り

オックスフォードの街から

平成元年六月二十八日

モスクワ空港での珍事件

大学も夏休みになり、学生は郷里へ、あるいはバカンスへとオックスフォードを去り、いれ代わりに観光客の姿が目立つようになりました。例年になく暑い夏となったオックスフォードですが、それでも雨降りの日などは、かなり気温も下がり、秋物の上着はいつも欠かせません。日本のように「衣替え」というような風習はこちらにはあてはまらないようです。街を歩いて、半袖姿があれば、皮ジャンを着た若者や、コートを着込んだ老人の姿も見うけられ、その個性の強さ―むしろ統一性のなさといったほうが適切でしょうか―驚かされます。

四月四日ソビエトのアエロフロート(SU)で成田空港を飛びたつて十九時間あまり、ようやくその日の夜十時、イギリスのヒースロー空港に到着いたしました。途中モスクワでは乗り継ぎのため、寒いなか、四時間も待たされました。空港の外に出る訳にもいかず、免税店ののぞきながら時間を費したわけですが、太陽の光が目を直撃するくらい異様に強烈であったことが、とても印象的でした。

ところで、モスクワからイギリスまで、アエロフロートは座席指定券を出してくれません。つまり全部自由席なのです。気ままな一人旅ならいざしらず、私のように妻と一歳半の子供を抱えた家族もちには大変シヨッキングなことでした。席がうまく横並びにとれなかったら一大事です。もしかしたら最悪の場合、オーバーブックキングがあったりして、

座れないかもしれません。これは大変なことになったとオロオロし始めた心配性の私は、何とか席を確保しようとして一時間前から列の先頭に並んでいました。ところがいざ改札が始まるや、一応は出来上がっていた列はたちまちのうちに崩れてしまいました。

我先にと争って横割りして来た連中によって、改札口はパニック状態に陥り、私の小さな娘などはベビーカーの中で、ガリバーの国に行った小人の如く、いつ踏みつけられるかもしれない危険にさらされてしまったのです。押し合いへし合ししながらようやくのこと、改札口を脱出、席もなんとか確保、ともかくモスクワを後にすることが出来ました。やはり旅行運賃をけちらずに、成田から約十二時間でロンドンに着く、ノーストップの直行便をもつ日本航空や英国航空にすればよかったですと後悔

いたしました。今では良い思い出です。

どこにあるのかオックス

フォード大学

世界屈指の学問の地オックスフォード、そして町を見降ろすようにそびえ立つ学問の殿堂オックスフォード大学、時計台を中心に整然と配列された古色蒼然とした煉瓦造りの建物、これが出発前に私が抱いていたイメージでした。到着時に降り出した雪もようやくやみ、時差ボケから立ち直った頃、このイメージの大学を捜すべく市内探索へと出かけました。ところが地図を見ても、市内を歩き回っても大学がないのです。どう探してもオックスフォード大学は見つかりません。私の抱いていたイメージの大学が存在しないのです。日本の大学のイメージがここでは通用しないことが分つたのは、かなり経ってからのことです。

イングランド中央部、ロンドンより列車で一時間、バスで一時間四十分くらいのとこに位置するオックスフォード市は、人口十一万五千人、そのうち約一割強にあたる一万三千五百人が大学生です。市の主要な場所は殆んど大学所有であり、全くといっていいほど大学町であります。

ある観光ブツクに「大学のなかに町がある」とありましたが、けだし名言といえましょう。また仏教に「群盲、象を撫でる」という表現があります。これは目の不自由な人たちが象の足や耳などを撫でて、象とはこういうものだとか様様な当て推量をすることに喩えて、枝末なことにとらわれると全体を把握できないことの欠点をいましめたものです。私の場合もこれと同じで、余りにイメージの大学に固執したため、本当の大学が発見できなかったのです。町自体がそのまま大学のキャンパスなの

です。キャンパスの中にバスも走れば、デパートもある、マクドナルドの店もあると思えば納得がいきます。ただし日本にあるような時計台を中心とした大学本部は存在しません。

University of Oxford とは、市内に散在する三五の College の統一体にすぎません。各カレッジは独自に試験をして学生を受け入れますが、彼らは皆卒業後、オックスフォード大学の学士号を取得します。各カレッジの学生数は平均して三百名ぐらい、一番多いカレッジでも四百名強、少ないカレッジでは二百名ぐらいしかいません。彼らは大体カレッジの寮に寄宿し、hall で食事をとります。ちなみに浩宮様が在学されたのは Merton カレッジ、礼宮様が在学しておられるのは St. John's カレッジです。

ところで興味深いことに各カレッジは独立採算制をとっています。つ

まり裕福なカレッジとそうでないカレッジとがあるわけです。この差がどういう形になって学生たちに反映するのかと申しますと、ホールでの食事の差もさることながら、各カレッジに所属する tutor の質と量にその差が現われてまいります。この大学の機構はなかなかむずかしく一口では説明するのは不可能ですが、あえて大胆に申し上げるなら、教育の基本は学生と教師との個人指導制 (tutorial system) にあります。学生は必ずしも講義に出席する必要はありませんが、一週間もしくは二週間に一度教師と面談し、個別指導を受けることが義務づけられています。大学の教授は勿論この制度に従い指導 (tutor) を行いますが、法律・経済・英文学といった学生に人気のある分野では圧倒的に教授の数が足りません。そこで各カレッジは、優秀な学者をカレッジ専属のチューター

ー (tutor) として雇い、彼らに高額の報酬を支払うのです。ですから裕福なカレッジほど優秀なチューターをたくさん雇うことが出来るわけで、学生にとって大きなプラスとなります。従ってそのようなカレッジは大学の中でも入学するのが特に困難となるわけです。先のセント・ジョーンズ、Balliol, New College 等が「お金持ち」との風評でした。

彼らチューターはあくまでもカレッジに所属し、大学とは関係ありません。いっぽう教授は副業としてカレッジでの指導を行うことは禁じられています。日本のように大講義に何百人もの学生を集めて授業を行うことはなく、一般教養課程もないに等しいカリキュラムですので、いきおい学生たちは、入学後直ちに専門分野の研究に従事することになります。大学での専門授業はカレッジではなく、各 Institute で行われます。

ちなみに私の専門のインド学・仏教学の授業はオリエンタル・インスティテュート (Oriental Institute) で行われています。ですからこの分野を専攻する学生たちは、各カレッジから、このインスティテュートにやってくるので、勉強するわけです。また理科系の学生は、市北部にある Divinity Science Area の各分野に応じた研究棟のなかで実験等を行います。

勉強好きな大学生

英国に到着して以来、急に勉強好きになった私の妻は、英会話を習いたいとしきりに言うようになりました。もともとおしゃべり好きの彼女ですから、英国人等と会話が出来るのが歯がゆく思えてきたのでしょう。毎朝 Good Morning とすれ違う人と挨拶をかわすだけでは確かに物足りません。市内には、無数に会話学校がありますが、この学校に入学

するのも考えものです。なぜかというと、まず非常に費用がかかる。英国には無数に英語の教師がいるので、すから、わざわざ高い授業料を払って、日本から英会話の勉強に来て、いるキヤピキヤピの大学生と勉強するのはナンセンスです。それより隣りの主婦とか、果物屋のおじさんと話すほうがずっと役に立つ、これが私の意見でした。実は、家内がいらないはずと一歳半の子供のお守りをさせられるのではないかという恐怖感が私の本音だったのです。

そこで私と妻との主張の妥協案として、女子学生に週に数回家に来て頂き、英語のレッスンを受けることになりました。これだと私は一時間ほど子守りをすれば良いし、私がいなくても妻は子連れ授業を受けることが出来ます。ほどなくして運よく日本語を専攻する女子学生にめぐり会うことが出来ました。彼女は一年

前二ヶ月ほど日本に滞在した経験があり、さらに今年の九月からは交換留学生として京都大学で学ぶ予定ですので、とても私たちには願ってもしない人物です。性格も几帳面でおとなしく、まさに優等性といったタイプです。約束の時間は厳守し、十分ほど時間を延長して妻に英語を教えてくださいます。私のようなはずばらん人間にはとても考えられないくらいまいな大学生です。

彼女が妻の教師となってから一月が過ぎた頃、日本語を学ぶ英国学生と、英国で学ぶ日本学生との交換パーティーに招待されました。あい変わらず日本人は同国人どうし集まり、英国学生とのコミュニケーションションは全くなく、まるで水と油のようでしたが、私は彼女が常に側にいてくれたおかげで多くの学生と話す機会がもてました。彼らと話して驚いたのは、勉強が純粋に好き

なこと、そして卒業論文のテーマをかなり前から決め、ちやくちやく準備していることです。日本の大学生は司法試験あるいは大学院進学といった目的をもつ者を除けば、十中八九勉強よりもアルバイトやレジャーに狂奔しています。就職するのには〇〇大学出身という肩書が必要なのであり、優の数はさして問題になりません。むしろ運動部について不屈のスポーツ精神を培ったことのほうを企業は高く評価します。これは英国でも同じで、成績優秀な学生はかえって、「退屈な人間だ」、「どうして大学院に進まないか」等の理由で企業に敬遠されます。それにもかかわらず彼らは勉強好きです。どうしてでしょうか。この交換会の後、少しの間この疑問に対する答えを検討した結果、私の独断的解答を次のようにだしてみました。

(一)個別指導の成果、日本のようにマ

スプロ教育でなく個別指導制のため、学生は勉強する意欲がしらずしらずのうちにわいてきます。教師との面談は受身の授業ではなく、今までに何をしたのか、これから何をするか、という明確な解答が要求されるのです。従って学生は常に準備をしていかなければなりません。しかも自分の興味ある分野を深めることが主目的であるため彼らはさほど倦怠感を抱かないのです。

(二)大学生としての自負、英国の大学進学率は十パーセントにも満たないのが現状です。これは米国や日本のように四、五十パーセントの進学率と比較して断然少なく、彼らには未だ「選ばれた者」という自負心が強く残っています。ただこれ程社会が高度化し複雑化している現状で、英国のような少数に開かれた門戸が良いかといえば、大いに疑問が残ります。

(三)国民性、日本人は物事を余り深くとらえず、知識も表層的にししかも広分野にわたって求めがちですが、英国人は深く専門的に物事を知ろうという傾向にあります。

(四)大学の環境、主都ロンドンから理想的な距離を隔ててあり、都会のもつ様々な刺激から解放されて十分に勉強に打ち込むことが出来ます。オックスフォード大学と肩を並べるケンブリッジ大学もやはりロンドンから列車で一時間半ほどの距離にある人口十万余りの町の中にあります。主都から離れることが、学者にも学生にも落ち着きを与えるのでしよう。しかも学生の大半はカレッジの寄宿寮に住んでいますので、友達同志お互いに啓発されるようです。

以上のような理由をたてて、彼らの勉強好きの解釈を試みましたが、やはり日本人の私にはなかなか理解しかねます。しかし見習うべき点が

数多くあることだけは確かです。

愛知学院大学文学部助教

善光寺海外留学僧

ロンドン在駐 引田 弘道



ワット・パクナムの一室から

図書館の件はどの位本が集まるかわかりませんが、一応台帳にするBOKとラベルだけは用意しておりますが本の部数によつて場所を決めて頂こうと思います。なるべく一階の図書部の方に場所をほしいのですが、まだ河北先生(注)にもこの件でお願いしてはおりません。

2、3回伺つたのですが留守の時ばかりでしたし、まだ状況が整っていないのでもう少し待つてからと思つています。

それに夏の暑さでこの一ヶ月半以上汗アレルギーであせもが胸から首までひどくなり汗をためない様に扇風機の風にあたつてばかりいましたら、今度はのどをやられ気管がやられ胸の奥からゴホンゴホンとせきが出てとまらなくなつてしまいました。薬を頂いてのんでも扇風機をつけない

とじわつと汗が出てきてあせもをちくちくと刺激しますので薬をつけてもだめですし、風にあたるとせきの方がひどくなると云う様にどちらをとつてもうまくありませんので夏の過ぎるのを待つています。

今年はずいぶん早くから暑くて日本語のラジオタイランドをきいていましたら、電力の消費量もこの暑さのために例年の10%以上も多いそうです。この二、三日あけ方に雨や雷がありますのでそろそろ雨季もちかいことでしょう、それ迄無理をしないで暑さにやられない様に注意しています。図書館が整つたら新聞の記事にしていたが、在留日本人の方等、仏教に関心ある方も利用できるのではないのでしょうか。

パクナム寺にもお詣りをかねて出かけてくる方があれば仏縁にもなると思います。

洪井師は今、カンボジアへトウドン

(行脚)の旅に出ておられます。二週間のビザがもらえたそうのでベトナム経由で行かれました。タイからは直接便がないそうので、ベトナムから一週間に一便飛行機が出ているそうです。

洪井師の日本語教室の方も数人の参加者があつて朝はやくからやつている様です。洪井師は次にベトナムへも行かれるそうのでベトナム語の本を手に入れて居られます。ベトナムからのメツチイ(在俗の尼僧)さんが居りましたので紹介してあげました。発音を吹き込んでもらいたいとの事。カンボジアから帰つたらと言う約束になつています。メツチイ・メータはなぜか私と中央郵便局その他の郵便局でばつたり出会うのです。タイ語が上手なのでタイ人とばかり思つていましたら、ベトナム人で十九歳のとき、二、三年のつもりでパクナム寺へ勉強に出てきたらそのまま十

五年もいて帰れなくなってしまうて
いるとの事です。南ベトナムのパス
ポートを持ったまま祖国は南北統一
されてしまい、そのまま両親にも会
えないそうです。

フエの方で南北の境に近いところは
戦争もひどかった事と思います。然
し来年はどうしても帰国すると言っ
ていました。(一度帰ったら再び出国
はむずかしいとか)パクナム寺にも
いろいろな人がいます。

今年の春のお彼岸に日本人会のバス
に便乗してカンチャナブリに参りま
した。泰緬鉄道建設のために亡くな
った人々のため第二次大戦中に日本
軍によって建てられた慰霊碑での法
要に参加しました。ワット・リヤッ
プの渡辺師のゲストとして行かせて
頂き、クワイ河の上の鉄橋も渡って
きました。写真の焼増をたのみまし
たら、フィルムを裏からやいたらし
く少しかしくなりましたが一枚同

封いたします。

その折とった写真の中に兵隊さんが
いっぱい居る様なとても不思議なの
がありました。私はあまりその様な
事は信じないのですが、戦争中の
色々のむごさを知っている最後の世
代です。

ビルマ方面で亡くなったたたくさんの
方々、そしていまだ十分に遺骨も収
集されず、供養もされない方々があ
ることは事実です。

自室の仏壇に写真を供えてお水をあ
げ数日朝夕お経をあげ、亡者回向を
しておきました。
小谷氏も見せてほしいとおっしゃっ
たので、ひきのばしてお届けしてお
きました。

タイ国派遣留学僧
バンコク在住 山本 浄月

(注)

河北国雄師 父は日本人、母はタイ
人、タイ僧名プラパーワナ・コーン
ン・テーラ、日本語が堪能な高僧で
ワット・パクナム副住職



生かされて生きる

大本山総持寺内 岩波弘道

(方行)

米国ニューヨーク州のマンハッタンより、車で北上すること約二時間。そこには道真寺というお寺があります。もともと、道真寺と言っただけでは現地の人々には、ここがお寺であるとはわかりません。そこでZEN MOUNTAIN MONASTERYという呼び方も合わせて用いられています。私は縁あって、二年前の八月までの四ヶ月間、この道真寺に滞在することができました。

道真寺には、二十各種のメンバーが住みこんでいましたが、他にも多くのメンバーがおります。彼らの指導に当たるのは、ジョン＝大道＝ロ

ーリー師。もちろんアメリカ人です。正式に僧侶になっているのは、居住者のうちでは二人。あとは、授戒と言つて仏教徒になる式をすませた人と、そうでない人が半々ずつでした。(道真寺では、得度は授戒の次の段階と位置づけられています。つまり授戒を受けない者は得度を受けられない＝僧侶になれない、ということなのです。)しかし、生活のスケジュールは皆一緒です。朝は四時半に起きて五時から坐禅とお勤めが六時四十五分まで。七時朝食。八時十五分作務(労働の時間)、他にも午後の坐禅と作務。勉強の時間、運動の時間

等があります。そして九時半に消灯します。

私はメンバーの中で特にジェジョと働くことが多くありました。彼はその名前から想像すると、スペイン語の国の血筋であると思われれます。背は高くありませんがしまった体をしており、とても人なつこいところがあります。ところでジェジョは、道真寺に来る前は刑務所にいたので。勿論、大道師を初め他のメンバーもそのことを知っています。そして、全く気にしている様子はありません。大道師は、定期的に刑務所へ出向いて坐禅の指導をしているのですが、ジェジョはそこで初めて坐禅に出会ったようです。

しかし、私には彼が悪い人間だとは、とても思えません。実際彼は、初めての土地で慣れないことばかりの私に、いろいろと世話を焼いてくれたのです。ですから、一時的とは

言え、彼が道を誤ったのには何らかの事情があつたのに違いありません。

次のようなことがありました。ジエジョには、母親とニューヨーク市で暮らしている娘さんがいます。彼女の名はルース。十四歳だそうです。ある日ルースは、夏休みを利用して一週間程父親の所へ遊びに来ました。ジエジョがルースを大道師に紹介した時です。彼女は自分の父親に向かつてこう尋ねました。

「パパ。この人、パパの御主人様？」
「違うよ。パパの先生(師匠)だよ。」
と、ジエジョが答えます。この時は、何気なく聞き流してしまいましたが、これは中学生位の女の子のする質問でしょうか。初めて会った人を主人かと問う娘と、主人ではなく先生であるか答える父親。私はこうしたやり取りを通して、彼らが生きている社会の問題点を垣間見た気がしました。

人の不幸の原因をすべて環境に帰するのは、少々乱暴な考え方です。

しかし、何らかの影響があつたとは言えるでしょう。つまり今まではジエジョに対し、彼が持つ力を発揮できるような助言してくれる人はいなかったのだ、と私は思いました。

御開山様瑩山禅師、二十七歳のある日のことです。お師匠様である徹通禅師は、お弟子の皆に「平常心は道」の意義をお訊ねになりました。

瑩山禅師は「茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す」この言葉の心はお茶にあつたらお茶を飲み、御飯にあつたら御飯を食べるといふことだと、お答えになりました。

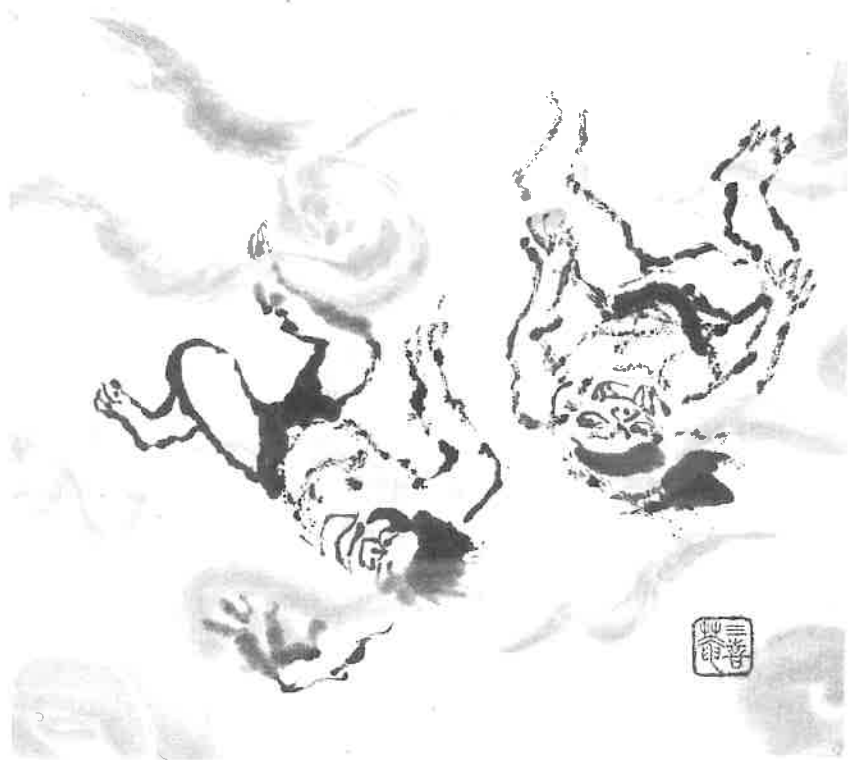
私は、特にジエジョのことを考える時、このお言葉を「その場その場で一所懸命やる、全力を尽くす」という風に頂戴したいのです。世の中、なかなか思い通りには参りません。私達の回りには、苦しいことや悲し

いことがたくさんあります。ですが私達は、生まれてきて今生きています。そして、生きている以上、よりよく生きたいと思う。これは私達の切なる願いであります。

私達は皆、私の種子(たね)を持つている訳ですが、良い種があつたら大きく育てなくてははいけません。そのためには、今この瞬間を大事にするという、今、今の連続である生き方であつて欲しいのです。何かを大切にして生かすということは、ただ無駄にしないというだけではなく、人でも物でもその持てる力を引き出し発揮させるといふことです。

今を大切に生きる時、私自身が生かされます。生かされた命を生きる、それこそが、よりよく生きることなのです。

(平成元年度春季布教弁論大会総裁賞受賞)



All the ceremonies and events to celebrate the 20th anniversary of the temple Zenkoji were successfully completed without troubles before, during and after them. I am deeply grateful to every one of the supporters of this temple for the successful celebration. In gratitude, I look back over the 20 years.

Every one of you, while quite young, might have listened with exciting heart in your mother's lap to her old tales, beginning with 'Once upon a time,···', or "Long, long ago,···". Ten years are said to make an epoch. "Long ago" sounds like an epoch ago, and "Long, long ago" like two epochs or 20 years ago. During two decades, worldly phases change beyond the scope of human imagination, and "Long, long ago" old stories attract children as if they were stories in a different world.

Twenty years ago, when I returned home penniless from the United States, I obtained by transfer a small hermitage which had been in the possession of someone, and founded Zenkoji temple in the form of a religious organization, as I wrote about this before. If you do not know this temple personally in those days, you will hardly be able to imagine how it was.

Now it has grown up to be told in old tales.

Throughout these 20 years, the temple has been able to make steady progress not only to strengthen its standing but also to extend some contribution to the world. With sheer happiness and gratitude, I have always been aware that the steady growth of the temple has been dependent on the encouraging support of you all.

In this 20th anniversary year, I had the honors of personally seeing Archpriest Yamada of the Tendai sect, Enryakuji, Mt. Hiei, and of talking with President Nikkyo Niwano of Rissho Kosei-Kai, in the growing reputation of the name of Zenkoji.

Zenkoji is now 20 years old, and I am aged fifty, the age when one may become aware of one's ordainment by the Heaven. To become aware of one's ordainment by the Heaven means to know what one is destined to achieve, or to attain the state of mind of doing one's best and leaving the rest to the Heaven. Now that I am in that age, I am determined deep in my mind to do my best in full awareness of the profundity of the Heavenly ordainment. Please encourage me with your ever strengthening support.

編集後記

第。

▼開創二十周年の記念事業、行事も無事終了いたしました。皆様のおかげと心から感謝しております。

▼本誌の表紙・挿絵でおなじみの伊藤三喜庵先生（当寺総代・日本南画院副理事）は去る五月、銀座和光にて個展を開催、たいへん好評を博した。その際出展の最高傑作釈迦三尊仏を当寺に奉納された。

▼昭和六三年度派遣留学僧、星宮智光師（叡山学院教授・天台寺門宗胎藏院住職）は七月より九月まで、フランス、ドイツ、イギリス三ヶ国において研修することになった。次号あたりに研修報告を掲載することができるかと思うのでご期待を乞う次

▼インドに留学した第三回派遣早田

啓子女史（昭和女子大学講師）は「アジア——聖なる空間を求めて——」をテーマとして、八月下旬、池袋プラザギャラリーにて個展を開催した。

▼第五回派遣、引田弘道師及び山本浄月師の報告を掲載したのでお読みください。

▼第三回派遣岩波弘道君は帰国後大本山総持寺に安居中だが、前掲のようこのたび布教弁論大会において総裁賞を受賞した。

▼第三回派遣の島崎義孝師（花岡大文学講師）は夏休みを利用してロス及びニューヨークの禅センターに善光寺派遣講師として参上した。また、中野良教師（東京・東禅寺副住職）

は、曹洞宗特派講師の委嘱を受け、ロスアンゼルス禅センターに赴いた。

以上、各位のご健勝と今後のご精進を祈念します。

▼海外留学僧派遣育英会の第四回総会を八月二九日に開催しました。詳細は次号に掲載いたします。

▼今月は秋彼岸の月です。先祖あつての私どもです。お盆や彼岸にはお寺詣りお墓詣りを忘れないようにしたいものです。

成寿 第十三号

平成元年九月十日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五（八四五）一三七一

印刷所 神奈川新聞社出版局



三尊





横濱善光寺